

農林漁業用揮発税財源身替農道整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

—飯島町内—

丸山遺跡

2003

長野県上伊那地方事務所

長野県埋蔵文化財センター

農林漁業用揮発税財源身替農道整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

—飯島町内—

丸山遺跡

2003

長野県上伊那地方事務所

長野県埋蔵文化財センター



丸山遺跡遠景（飯島町提供）



調査区から中央アルプスを望む



石組のある土坑 (6号土坑)



1号住居跡から出土した土器

序

本書は、平成13年度に上伊那郡飯島町本郷地区において、農林漁業用揮発税財源身替事業（農道整備事業）に伴い実施された丸山遺跡の発掘調査報告書であります。報告書はその成果を記録として保存し、広く一般に周知することを目的としています。

中央アルプスの東麓に広がる飯島町は100を越える遺跡が認められており、その大半が縄文時代中期の遺跡です。それらの遺跡のほとんどはアルプスによってつくられた扇状地の上であり、現在の中央道から天竜川にかけての台地の上に点在しています。

伊那谷はかつて、中央道遺跡調査会の諸先学によって数多くの遺跡が調査され、おびただしい量の情報がもたらされました。それらの成果は、現在、縄文時代中期の席草文土器を語るにはなくてはならないものとなるなど注目を集めています。

丸山遺跡の発掘調査の結果、縄文時代中期の集落の一部が明らかとなりました。また、出土した遺物からは、遠く東北地方の大木式の色彩の濃い土器や東海地方の影響を感じさせる土器など、上伊那南部の地域史を考える上で貴重な資料を得ることができました。今回発掘された資料が末長く利用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた長野県上伊那地方事務所土地改良課、飯島町・同教育委員会・同歴史民俗資料館（陣嶺館）などの関係機関、地元の地権者・関係者の方々、直接ご指導を賜った長野県教育委員会・生涯学習課、また発掘調査・整理作業に携わっていただいた多くの方々に感謝を申し上げる次第であります。

平成15年3月25日

財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長 深瀬 弘夫

例言

- 1 本書は、農林漁業用揮発税財源身替に伴う上伊那郡飯島町丸山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は長野県上伊那地方事務所の委託を受けた財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター（以下、長野県埋蔵文化財センター）が実施したものである。
- 3 遺跡の概要は長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター』18で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 整理作業は長野県埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 本書で使用した地図は国土交通省国土地理院発行の地形図「伊那宮田」「赤穂」「伊那」（1:25,000）、飯島町役場発行飯島町都市計画図（1:2,500）、飯島町誌上巻付図・飯島町遺跡分布図等を使用し編集した。
- 6 航空写真、測量、全体図、遺構平面図の一部は株式会社 協同測量社に委託した。
- 7 巻頭図版の航空写真は、飯島町役場から貸与・提供を受けたものである。
- 8 出土炭化物の理化学的分析・同定は以下の機関に依頼し報告いただいた。
炭化種子同定（株）パレオ・ラボ
石器使用痕等観察（有）アルケリサーチ社
- 9 発掘調査および整理作業の分担は本書第1章に記載してある。
- 10 本書の執筆は以下の通りである。
第1章から第3章 第3節までと第5章 藤原直人
第3章 第4節 中村智美
第4章 新山雅広（株：パレオ・ラボ）
- 11 本書の編集・校正は、藤原直人が行い、調査第一課長広瀬昭弘が全体を校閲した。
- 12 本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は、飯島町教育委員会が保管している。

凡例

1、本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。

a) 遺構実測図

竪穴住居跡 1:60

遺構内施設 1:30

土坑 1:40

b) 遺物実測図

土器実測図 1:4 土器拓影図 1:3 土偶 1:15 土製品 1:1

石器 1:3 (一部 1:4)

2、遺物写真の縮尺は以下の通りである。

土器 1:4・1:3 (一部便宜上不統一のものもある) 土製品 1:2

石器 1:2, 1:3

3、実測図中の網掛は下記のように用いた。



地山



焼土



火床



石皿等使用面・付着炭化物

目次

巻頭図版

序

例言

本文目次

第1章 序説	1
第1節 調査の経過	1
1 発掘調査委託契約 2 調査体制	
第2節 調査の方法と整理	3
1 発掘調査の方法	3
2 整理の方針と報告書の構成	4
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
1 地形の概観 2 遺跡の立地と遺跡	
第2節 歴史的環境	11
第3節 基本層序	12
第3章 遺構と遺物	15
第1節 竪穴住居跡	15
第2節 土坑	43
第3節 土偶・土製品	48
第4節 石器・石製品	48
第4章 化学分析・炭化種実	68
第5章 結語	72

第1章 序説

第1節 調査の経過

1 発掘調査委託契約

長野県上伊那地方事務所は飯島町本郷地区において農林漁業用揮発税財源身替農道整備事業を計画した。事業地周辺、飯田線を挟んだ北側の隣接地の本郷原林遺跡は昭和55年に発掘が行われ、縄文時代中期と平安時代の竪穴住居跡7軒が明らかになっている。また、建設予定地内には周知の遺跡として、密度の濃い縄文時代中期の集落遺跡の存在が予想され、その結果、丸山遺跡は事業に先立つ発掘調査が必要と判断された。

以上のことから、長野県上伊那地方事務所、長野県教育委員会、飯島町教育委員会、長野県埋蔵文化財センターの関係機関が協議し、長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。丸山遺跡は表探の結果などから建設予定全域を調査対象としたが、南半については試掘結果をみてから表土剥ぎを行うかどうか判断することとなった。

発掘調査は平成13年度に行い、報告書刊行に向けた整理作業は平成14年度に行った。

2 調査体制

平成13年度から14年度にかけての発掘調査および報告書刊行に向けた整理作業は、財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが管轄した。以下、年度毎の調査体制と調査機関、調査概要をあげる。

(1) 平成13年度

調査体制 理事長 田中康夫
所長 深瀬弘夫
副所長兼管理部部长 春日光雄
管理部長補佐 田中照幸
調査部長 小林秀夫
調査第一課長 百瀬長秀
調査研究員 藤原直人、白居直之、市川隆之、桜井秀雄
調査期間：平成13年5月9日～9月27日、10月9日
調査面積：約4100㎡

調査の概要日程

5月10日～試掘（北地区：プレハブ・駐車場予定地）の結果、遺跡の存在は認められないと判断。
5月16日 本調査開始。
7月14日 現地説明会実施
7月19日 空撮
8月8日 閉所式
8月28日 松島・寺平氏来訪

10月4日 東端部、試掘調査（遺構遺物なし）

(2) 平成14年度

調査体制 理事長 藤井世高
 所長 深瀬弘夫
 副所長兼管理部部長 原聖
 管理部部長補佐 田中照幸
 調査部長 小林秀夫
 調査第一課長 廣瀬昭弘
 調査研究員 藤原直人

(3) 指導者・協力者

発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表します。(敬称略)

丸山浩隆・桐原健・田中清文・神村透・吉川金利・望月和幸・林茂樹・寺平宏・松島信幸・阿部明彦・菅原哲文・斉藤主税

(4) 発掘調査および整理作業参加者

発掘調査

遠藤恵美子・大沢進・片桐正三・亀山福治・栗田文雄・栗田正子・小池律子・小林一枝・小林要・小林幸子・小林ひとみ・三松雅春・千村正子・知久平彰・中村ヤスエ・野口もとえ・林 優・平野秀子・松下昭五・南谷秀子・宮下淑江・宮下安保・紫芝穂波・森谷勇一・矢沢秀雄・山口敏子・吉川範美・米山利秋・米山ともえ

整理作業

三上義子・山下千幸 (敬称略)

第2節 調査の方法と整理

1 発掘調査の方法

長野県埋蔵文化財センターでは受託事業が広範に及び、継続的な調査となることが予想された。そのため、調査法の共通認識と調査の統一性を図るため「遺跡調査の方針と手順」を作成し、以降これに沿って発掘調査が行われてきている。本調査もこれに従い調査を行った。

a) 遺跡の名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている「丸山遺跡」とした。記録の便宜のため大文字のアルファベットの3文字を用いた遺跡記号「HMY」とした。3文字の先頭の「H」は長野県を9分割した地区の記号で「上伊那」を示し、2・3文字目は「MARUYAMA」[M]と「Y」を使用した「HMY」を使用した。この記号は今後の保存活用に用いられる。

b) グリッドの設定

調査区(グリッド)の設定は、国家座標のメッシュに従うことを原則とした。測量基準点は国土地理院の平面直角座標の原点(Ⅲ系、 $X=0.0000$ 、 $Y=0.0000$)を基点に200の倍数値を選んで、調査区内のX軸・Y軸を測量基準線とした。これをもとにグリッドが設定され、大々地区(200×200m)・大地区(40×40m)・中地区(8×8m)・小地区(2×2m)に区分した。

調査対象区は斜面部と一段下がった平坦部(水田域)の2地区に地区割りを行う予定であったが、試掘トレンチの結果上部の斜面部以外からは遺構・遺物が検出されず、ほとんどが削平など後世の破壊を受けていることが判明したため。事実上、斜面部の一部が本格的な調査範囲となり大きな地区区分は行わなかった。

大々地区・大地区・中地区などの測量杭は測量業者に委託し実施した。

調査で検出され対抗の記録および遺物の取り上げ等は、遺構名のほかに中地区の基準杭の名称を使用した。

c) 遺構記号と遺構番号

遺跡名称は記録の保存活用のために便宜上つけたものである。遺構記号は基本的に調査時に決定するため、遺構検出・調査の状況によりさまざまであり、必ずしも個々の遺構の性格を端的に示すものではない。遺構番号は掘削調査前の判断で付けられることから、当時の時間軸にかかわらず検出された順番で付けられている。最終的な遺構の名称は整理作業の段階で決定し、アルファベットの記号から日本語の表記に変更している。以下にその内容を明示しておく。

本書で使用した遺跡記号と変更点(なお、遺物や遺構図面の注記については調査中に付けたままの状態でも保存する)。

○SB:2m以上を日安として平面形が方形・円形・楕円形・多角形の掘り込み。竪穴住居跡・竪穴状遺構。(本書では住居跡あるいは、竪穴住居跡と表記した)

○SK:SBより平面形が小さく、単独、もしくはほかの遺構と関係が認められない掘り込み。(本書では土坑と表記)

d) 測量

測量遺構の測量は簡易測量により、調査研究員および実測指導を経た作業員が行った。実測用の測量杭は、表土剥ぎ後、遺構の確認された区域のみ8mグリッドを設定した。その他、遺構の見られないところはその地区ごとに適宜最小限の杭にとどめ設定した。実測図は個別の遺構に関しては1:20平面図は測量業者の単点図をもとに結線し、それ以外の図面は人手による実測を行った。全体図・地形コンタ図等は測量業者の単点測量図面(1:200、1:100)を加工して使用した。

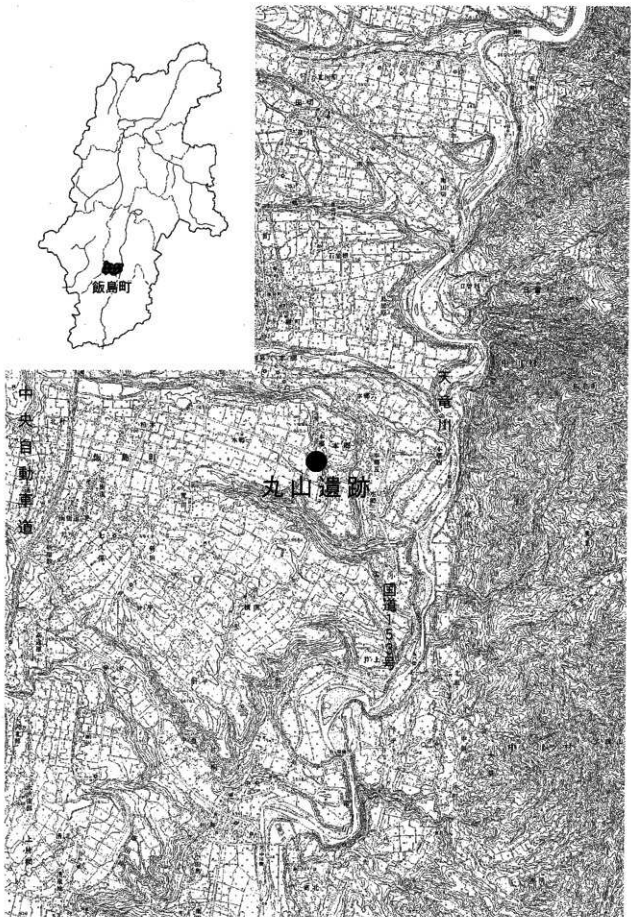
e) 写真

発掘調査中の遺構等の写真撮影では、6×7版と35mm版カメラを使用した。6×7版カメラは取り回しや重量の関係から完備写真や特徴のある遺物の撮影、将来にわたって普及公開活動などで大判に引き伸ばすことが予想されるものに関して使用し、基本的な遺物出土状態や遺構写真については35mm版カメラを使用した。撮影は調査研究員が行い、現像・焼き付けは専門業者に委託した。ラジコンヘリコプターによる航空写真は平成13年7月19日に実施した。

2 整理の方針と報告書の構成

平成13年度の発掘調査終了後の冬期整理期間中に遺物の洗浄と注記、それに並行して図面・写真の分類・整理を行った。また、測量業者から納品されたデジタル遺構測量図の修正を合わせて行った。

平成14年度、遺構実測図については、測量業者から納品されたデジタル遺構測量図の修正・加工、それに合わせて全ての遺構図面はグラフィックソフトのイラストレーター(windows・macintosh版)を用いたデジタル化を試みた。遺物図に関してはハード・人員の制約から従来通りの方向で行い、編集割り付けは割り付けソフトを用いて行った。



第1圖 遺跡位置圖

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

1 地形の概観

伊那谷は天竜川の上流域に形成された山間盆地で、木曾山脈（中央アルプス）と赤石山脈（南アルプス）にはさまれた細長い形をしている。また、谷の形成過程の違いなどから上伊那北部・上伊那南部・下伊那の3つに区分されている。

上伊那北部は辰野町から伊那市までで、あまり開析の進んでいない扇状地が多く見られる地域である。一つは木曾山脈北部、経ヶ岳山塊の山麓域に広がる扇状地群で、もう一つは赤石山脈に起源を持つ三峯川によって形成された、六道原と呼ばれる大型の扇状地である。これらの扇状地地形を代表とする地域である。

上伊那南部は駒ヶ根市周辺が中心で、木曾山脈の山麓域に形成された大型扇状地群からなり、扇状地の浸食や開析によって複雑に形造られた地域である。遺跡のある飯島町は上伊那南部に分類される。

下伊那は新旧の扇状地群と扇状地を開析した複雑な段丘地形からなり、伊那盆地南半分の広大な地域である。天竜川の西側と東側で異なり、また、阿智・下条も天竜川東西地域とはその形成過程が異なる。

上伊那南部域の地形面形成の概略

赤坂期は木曾山脈側から天竜川に向かって押し出している大型扇状地で、与田切川扇状地と中田切川扇状地という2つの大型扇状地を発達させた時期までを赤坂期と呼び、その堆積頂面を赤坂面という。両扇状地の形成は、中期更新世の後期と位置づけられていて、赤坂面には御嶽第1軽石層を風成で載せている。

後期更新世に入ると最終間氷期から最終氷期の初めにかけて侵食期に入り、与田切川と中田切川の両扇状地が侵食され始める時期を辻沢期と呼び、その頃形成された面上には約6万年前頃降下した三岳スコリアを風成で被覆させている。その面は辻沢面と呼ばれる。

辻沢期に続く時期（約5万年前以降）は、赤坂面の侵食が進み中田切川と与田切川が現河床近くまで侵食されている。その後、最終氷期の最盛期のため木曾山脈からの礫の供給が活発化し、過剰堆積により谷は埋まり新しい扇状地が押し出した。その結果形成されたのが鳥居原扇状地で、鳥居原面上には新时期テフラ上部を被覆させることから4万年前の形成とされる。

さらに後期更新世の後期から現在まで再び侵食期に入り、現地形の形成に至る過程で扇状地の解体が起こり、扇状地が段丘化する時代にいたる。形成された地形を時代順であげると本郷面・追引面・南割面となる。

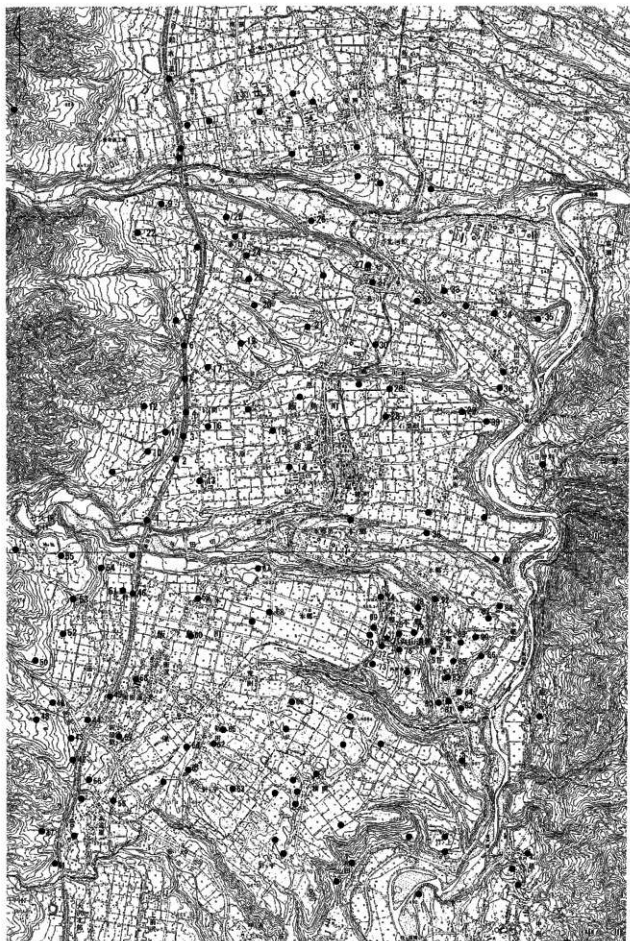
本郷面は面上に一番新しいテフラを薄く載せていることから約3万年前前後と考えられている。

追引面は段丘面をさらに刻んだり、山麓部などで最新の小扇状地の押し出しが起こった時期で、黄褐色土中にAT火山灰を含むことから、2万年前前後に形成されたものとされる。

南割面は現河川筋や谷筋に低位沖積面を造った時期で、1万年から数千年前と位置付けられている。



第2圖 道路周辺地質圖 (飯島町誌 付圖 改変)



第3図 飯島町遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代			備考		
				早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	古代		中世	
1	うどん坂南	飯島町岩間		○	○		○		○						
2	うどん坂Ⅱ	飯島町岩間					○		○			○			
3	うどん坂Ⅰ	飯島町岩間					○						○		
4	山澤	飯島町岩間					○	○					○	○	
5	八幡林	飯島町高尾					○								
6	石上神社前	*			○		○					○			
7	庚申平	飯島町田切					○								
8	太田沢春日平	*					○	○	○		○		○		
9	久根平	*					○								
10	岩間上山	飯島町岩間	○		○	○	○								
11	宮の平	*					○								
12	岩間中原	*			○		○								
13	大正新田	*					○			○					
14	上の原Ⅰ	*					○							○	
15	上の原Ⅱ	*					○							○	
16	岩間城(町谷)	*					○			○				○	
17	岩間鈴の面	*					○								
18	高尾第3	*					○								
19	高尾第2	*			○		○			○					
20	高尾第1	*					○								
21	陣場	*					○					○			
22	柳脇	飯島町田切					○								
23	田切町谷	*				○				○					
24	春日平中原	*				○	○	○	○	○					
25	久根平東	*			○		○								
26	山の神	*					○								
27	孔子廟	*					○								
28	石曾根堂前	*					○					○			
29	天野	*					○							○	
30	原畑	*					○								
31	浦引	*					○	○							
32	南荆	*					○					○			
33	北河原	*					○								
34	中平	*					○								
35	田切月夜平	*					○								
36	平沢	*					○								
37	塚垣外	*					○								
38	小段	飯島町島居原													
39	唐沢城址	*												○	
40	トヤゴ城址	*												○	
41	跡物跡原	飯島町高遠原					○								
42	鳩尾天台	*					○	○				○			
43	鳩尾	*			○		○	○				○	○		
44	尾越	飯島町上通り					○	○	○			○	○		
45	道満	*					○							○	
46	北原東	飯島町北村			○		○	○							
47	三林	飯島町高遠原					○								
48	藤平	*					○	○							
49	中河原	飯島町上通り					○	○				○	○		
50	月夜平	*					○								
51	北原西	飯島町北村			○		○	○				○	○		
52	北村天台	*					○					○			
53	赤坂	*			○									○	
54	寺井(寺通)	*					○								
55	千人塚	*										○	○		
56	高遠原中原	*				○	○	○				○			北は高遠原

第1表 遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代			備考		
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期		古代	中世
57	新屋敷	飯島町新屋敷					○								
58	南街道	飯島町南街道					○								
59	柏木	飯島町柏木					○								
60	カゴ田	*					○				○	○			石製模造品
61	針ヶ平第1	飯島町七久保					○				○				
62	針ヶ平第2	*					○				○				
63	針ヶ平第3	*					○				○				
64	山の神	*					○								
65	新田	*					○				○				
66	荒田	*					○	○				○			
67	本郷堤北	飯島町本郷					○								
68	本郷第1	*					○								
69	原林	*					○					○			
70	堤の窪	*					○	○							
71	丸山	*													
72	中山	*		○			○		○						
73	寺林	*					○								
74	大見山	*					○								
75	十王堂坂の上	*					○								
76	与那田	*			○										
77	寺平	*										○	○		梵鐘鑄造遺構
78	丹那陸	*					○								
79	権代林	*					○								
80	古町	*					○								
81	陣道内	*					○								
82	前の田	*					○								
83	南羽場	*			○		○								
84	清水	*						○	○						
85	北羽場	*					○					○			
86	石森社	*					○	○				○			
87	宮の北	*					○								
88	窪畑外	*					○								
89	田中	*										○			
90	本郷小原	*					○	○				○			
91	十王堂沢	*					○								
92	栗射山	*					○								

第2表 遺跡地名表(2)

2 遺跡の立地と遺跡

中央アルプスから流れ出る与田切川によって造られる扇状地端部の舌状台地に位置し、遺跡の東側には天竜川が太平洋に向かって南流している。

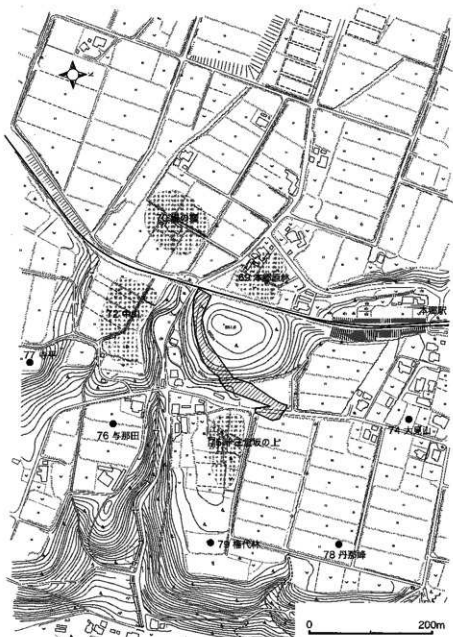
丸山遺跡のある本郷地区の台地上には縄文時代の遺跡が数多く存在している。特に丸山遺跡の南を流れる十王堂沢川の兩岸には縄文時代中期を中心にして草創期～晩期の土器・石器などが出土している。丸山遺跡の西（JR 飯田線をはさんだ対岸）には本郷原林遺跡（69）・堤の窪遺跡（70）が、東方向には十王堂坂の上遺跡（75）・権代林遺跡（79）、南方には中山遺跡（72）・梵鐘鑄造遺構が確認された寺林遺跡（77）・与那田遺跡（76）が知られているところである。また、南の西岸寺付近には飯島城遺跡（寺平遺跡に近接）などの中世遺跡が存在する。本郷原林遺跡は、昭和56年、飯島町教育委員会によって調査の報告がされており、縄文時代中期後葉の住居跡が5軒確認され、多数の土器・石器が出土している。十王堂坂の上遺跡は、昭和57年の飯島町教育委員会の報告で、縄文時代中期中葉の住居跡13軒・土坑（貯蔵などの目的の穴）106基などが明らかにされている。

第2節 歴史的環境

飯島町は中央アルプスの稜線から天竜川左岸にまでおよぶ東西に長い町であるが、遺跡が認められるのは山麓から天竜川までの区域で、本陣のあった飯島地区、与田切川右岸の本郷地区、更にその南の七久保地区の3つの地区に大きく分けられる。また、考古学の分野では、遺跡の分布・立地などから飯島地区の西部・飯島地区の中央部・田切地区・日曾利地区・本郷地区・七久保地区の5つに区分されている。

飯島地区は太田切川の右岸と与田切川の左岸に挟まれた扇状地上に位置し、その中央部には郷沢川が天竜川に向かって東流している。本地区は大きく分けて現中央自動車道沿いの山麓部（西部）と天竜川寄り（中央部）の2地区がある。

山麓部（西部）は中央自動車道建設のための事前調査によって数多くの遺跡が報告されており、縄文集落の立地という点からも好条件で貴重な資料を多数提示している。山溝遺跡（4）・岩間上山遺跡（10）・高尾第1遺跡（20）などは上伊那南部域を代表する縄文時代中期の集落である。山溝遺跡は中央自動車道に伴い調査され、縄文時代中期後様の後半の集落遺跡が明らかになっている。該期の竪穴住居跡がB地区で7軒、E地区で17軒が検出されている。また、多くの土坑や宗教的色彩の濃厚な住居跡が確認されている。該期以外では、縄文時代早期と後期前半の土器が検出されている。岩間上山遺跡は鳥居龍藏氏を始めとして、八幡一郎氏らによっても調査がなされている。本格的な調査の手の入ったのは、昭和54年の県営ほ場整備によるものであった。本跡では縄文時代中期後半の曾利Ⅱ～Ⅲ式に相当する竪穴住居跡が7軒確認されている。本地区には前述した2遺跡の他に特筆すべき高尾第1遺跡がある。遺跡の立地は高尾高地、現在の中央自動車道東側の台地上にある。大正時代の鳥居龍



第4図 遺跡周辺図

蔵氏の考古学的調査から始まり、その後、地元の小学生や在野の研究者らによって土器や石器が収集されていた。昭和55年には県営ほ場整備事業に伴う発掘調査で全面調査が行われている。その際確認されたのは縄文時代中期中葉から中期後半にわたる竪穴住居跡で51軒を数えている。未調査の地区などを考えると当地地上には密度の濃い集落があったことが予想される。

飯島地区中央部は現在市街地で、山麓部のような拠点的な集落はほとんど確認されておらず、唯一、堂前(どうぜん)(28)遺跡があるのみである。堂前遺跡は昭和53年、県営ほ場整備事業に先立ち調査され古墳時代・平安時代の集落、縄文時代中期後葉の住居跡9軒・土坑群、縄文時代後期の配石遺構が検出された。

田切地区は飯島地区の北側、太田切川寄りの一帯で中規模な集落遺跡が確認されている。本地区の比較的大きな規模の集落遺跡としては島居龍蔵氏によって初めて本格的な調査がされた町谷遺跡(23)が知られ、昭和49年には県営ほ場整備事業の事前調査によって8軒の縄文時代中期後半の集落が確認されている。また、縄文時代前期末葉の諸磯c式・晩期の水式の完形を出土している太田ノ沢春日平(24)遺跡は、昭和47年の中央道に伴う発掘調査で中期中葉の竪穴住居跡を検出しており、縄文時代前期後半・中期前半・晩期終末まで断続的に続いた遺跡としてあげられる。

日曾利地区の現在の集落は標高750m前後の高所にあり、山ノ田(やまんだ)と呼ばれている。その山ノ田の下方標高600m前後の箇所には小規模な扇状地が形成され、縄文・弥生時代の人間の痕跡が散見される。

本郷地区では24あまりの遺跡が知られ、主に与田切川の右岸に広がる舌状地の先端付近、十王堂沢川をはさんで縄文中期を中心とする集落跡が展開している。今回報告する丸山遺跡もその一角にある。丸山遺跡の西(JR飯田線をはさんだ対岸)には本郷原林遺跡(69)・堤の窪遺跡(70)が、東方向には十王堂坂の上遺跡(75)、他に田中遺跡(89)・本郷中原遺跡(90)が知られるところである。

七久保地区は飯島地区の山麓部同様、中央自動車道の開発に伴って多くの発掘調査がなされた地区である。旧石器時代の針ヶ平遺跡(62)。縄文時代早期では赤坂遺跡(53)・カゴ田遺跡(60)。縄文時代中期を中心とした集落では鳴尾天白遺跡(42)・高遠原遺跡(56)・尾越遺跡(44)が知られている。

高遠原遺跡は県営ほ場整備事業の事前調査、他2遺跡の調査は中央自動車道建設に伴うものである。高遠原遺跡は急傾斜地上にあり、水田造成の破壊を受けているものと考えられている。検出遺構は1軒の竪穴住居跡の他、3か所の大型竪穴状遺構・三十数基の上坑など遺構の確認数こそ少ないものの、遺構の特殊性を考えると貴重な調査であったといえる。

鳴尾天白遺跡は昭和46年、中央自動車道建設に伴い発掘調査され調査区内からは縄文時代中期中葉末から後葉の竪穴住居跡10軒、土坑36基が検出されている。本遺跡は高遠原遺跡から道を隔てた南東にあり、時間的にもほぼ同時期と考えられることから、あるいは、同じ集落の範疇でとらえられるべきものかもしれない。

尾越遺跡は中央自動車道建設に伴い昭和46年発掘調査されている。その際検出された遺構は縄文時代中期後半の竪穴住居跡24軒・後期前半の竪穴住居跡4軒・配石遺構8基・土坑101基を数える。中期後半の24軒の竪穴住居跡は、大きく3期に時期区分される可能性が示されている。該期の出土土器の様相から唐草文土器様式が東海地方との交流を示す土器が数多く出土しているのは注目されるべきものである。

第3節 基本層序

先に述べたように、飯島地帯は中央アルプスから押し出された土石による扇状地が発達し、さらにその上にロームが覆って形成されている。丸山遺跡のある飯島町本郷地区はその扇状地の扇尖部の先端寄

りにあたる。

上記のような立地の遺跡であるため、調査時の遺構確認面はローム層直上として主に重機による表土剥ぎを行った。しかし、遺物は数多く出土するものの、遺構には当たらなかった。検出されたのは風倒木や木の根を抜いた痕など遺構とはほど遠いものであった。それらの疑わしいシミ状のプランを数個半載したところ、調査区北西部のピットの底から炭化物を混入する遺構の覆土と考えられる土壤が検出されたため、先行トレンチを入れ1号住居跡を確認した。そこで遺物の多い箇所や、やや色調の暗い地点に数本のトレンチを入れた。その結果、数軒の竪穴住居跡が確認出来たことから、本来の遺構確認面はⅢ層ではなく30～40cm下のⅣ層であることが判明し、そのレベルまで重機による表土剥ぎを再度行い、遺構の検出にあたった。

しかし、ローム層での遺構確認はローム台地上の調査では当たり前であったのだが、今回の調査では何らかの要因で持ち込まれた疑似ローム（Ⅲ層）にてこずった結果となった。縄文中期以降に気候の変化に伴って洪水がたびたび発生し、ロームを持ち込んだのではないかという意見や時期ははっきりわからないが戦前に撮った写真では調査区上部が閉塞されており、その際削平された土壤が持ち込まれたものか、いずれにしても不明のまま調査を終えてしまい、責任を感じる。

土層注記

I層：表土層

I'層：黒褐色土（10YR3/2）木の根の痕跡

II層：暗褐色土（10YR5/8）

III層：明黄褐色土（10YR6/8）疑似ローム。やや粘性あり、層厚30～40cm。

IV層：明黄褐色土（10YR6/8）遺構確認面。やや粘性あり、IV層より締まりあり、新規テフラより細粒で構成される。

IVa層：明黄褐色土（10YR6/8）やや粘性あり、IV層より締まりあり。

V層：明黄褐色土（10YR6/8）粘性があるが、締まり弱い。新規テフラ（上部）

VI層：黄橙色土（10YR7/8）締まり有り、粘性弱く硬質。

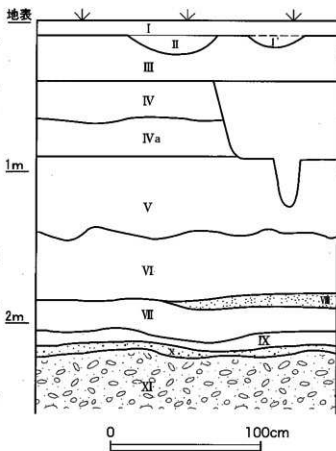
VII層：黄橙色土（10YR7/8）締まり有り、粘性弱く硬質。X層の白みを帯びる軽石を少量混入。

VIII層：明黄褐色土（10YR6/8）伊那層。

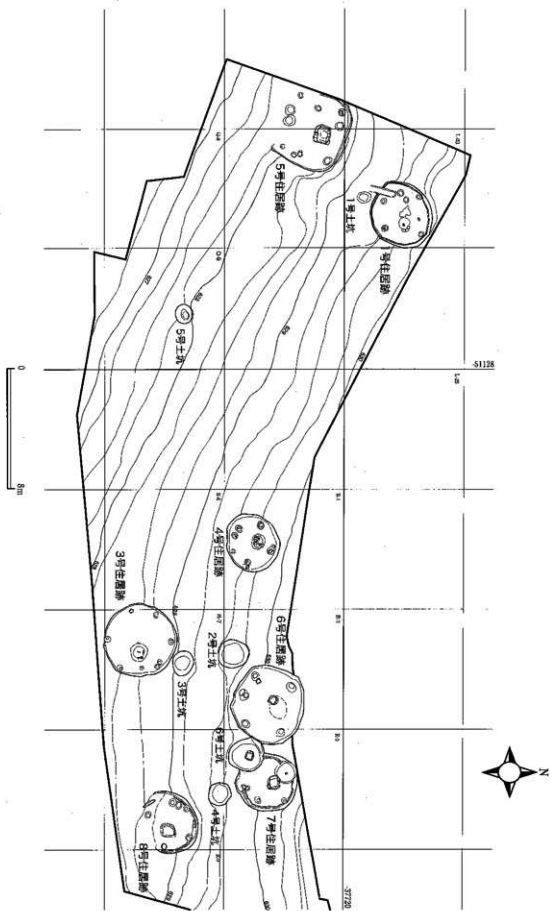
IX層：御岳第一軽石層

X層：にぶい赤褐色土（25YR5/4）やや粘性が有り、締まりある。

XI層：人頭・こぶし大の礫層。X層が礫の間に入り込む。



第5図 基本土層図



第6图 丸山遺跡調査区全体図 (1:250)

第3章 遺構と遺物

丸山遺跡は上伊那郡のほとんど南端の飯島町にあり、中央アルプスの形成した扇状地上に位置する。東側は断層崖と天竜川の侵食を受けた河岸段丘が見下ろせる台地上にある。調査区は丸山という小高い丘陵の南側斜面にあり、南から北に向かって勾配のある傾斜地である。

丸山といわれる小高い丘陵の南斜面全体から遺構が検出されると予想されていたが、予想に反して遺構の認められたのは西寄り半分の地区で、東側は平坦面があるにもかかわらず一つの遺構も確認出来なかったため、表土剥ぎのみ行った。開墾などの耕作のよるものが、集落として何らかの意味があって空白域を残したのか、道路幅だけの調査では如何とも為難いところである。

その傾斜地の遺構確認面の検出作業はロームを確認面として捉え重機によって行ったが、遺物は出土するものの遺構の検出に手間取った。それはⅢ層（明黄褐色ローム）が本来の確認面Ⅳ層の上に載っていたためで、再度重機を入れ表土剥ぎを行うのにかなりの時間を要した。（詳細は13ページの基本土層の項）



第7図 調査範囲図

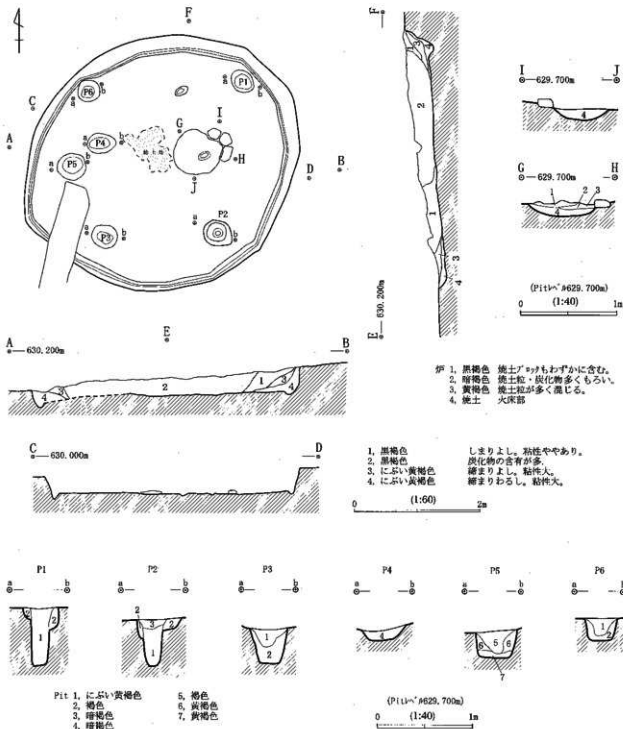
1 竪穴住居跡

1号住居跡（第8～13図 PL 2・12）

調査区の西端部L-23グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。本跡の上には調査開始当初、基本土層でローム層（確認面）としたローム類似層が20cm程覆っていたため検出できなかった。その2次堆積したローム（ローム類似層）で確認された擾乱を半截したところ、擾乱の下部に炉と考えられる焼土が検出されたため調査方法を変更し、東西・南北にトレンチを設定し掘り下げたところ、住居跡の壁と思われる立ち上がりが確認されたため住居跡として認定し調査にあたった。

規模は長軸（東西）は4.8m、短軸（南北）4.1m、検出面からの深さは最大で428cmを測る。平面形は東西に長い多角形（10角形あるいは8角形の可能性が考えられる）を呈する。

覆土は4層に分層された。3・4層は黄褐色のローム層で地山に非常に似ていて壁の検出に苦慮した。2層は炭化物粒子を多く含み、断面形状がやや不自然であることから、本跡より新しい時期の別遺構ではな

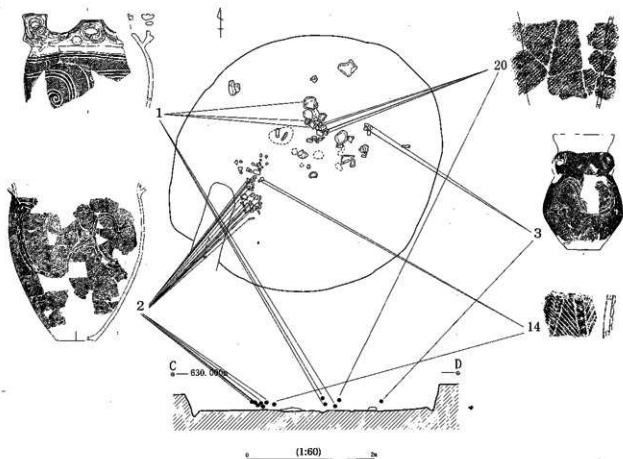


第8図 1号住居跡

いかと考えられたため、さまざまな可能性を想定しながら慎重に調査を行った。その結果、2層が床面を侵していないこと、2層確認時の平面形が不整形であること、出土遺物に時間差がそれほど認められないことなどから、人為的な行為によって一気に埋め戻された可能性の高いことを優先し、本跡の覆土であると結論した。

壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、直下には周溝が全周する。

床は貼床ではなく地山のロームを敷き締めた硬化面である。硬化の範囲は西側の壁側を除きほぼ全面である。ピットは6基検出された。このうちピット1・2・3・6の4基が主柱穴と捉えられる。



第9図 1号住居跡 遺物出土状況

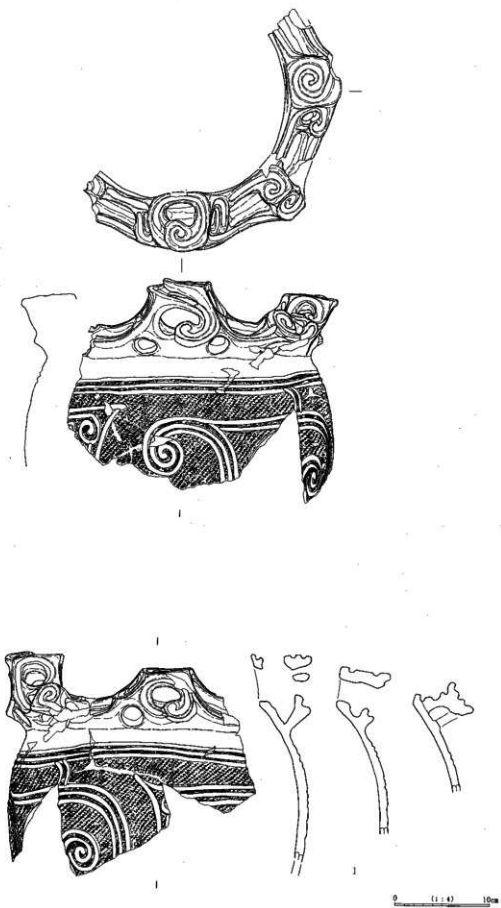
炉は住居跡中央部の東寄りに設けられている。規模は掘り形で85cm×78cm、深さ12cmを測る。本跡の炉は本米、石圍炉であったと思われるが残存していたのは3個の炉石にとどまる。炉底は全面的に焼けていた。炉の西側には炭化物を多く混ぜる焼土塊（2層に伴うものか）が検出された。

遺物の出土状況は比較的多く、炉石周辺のものを除くと破片資料が多く、炉石周辺の土器は床面に近いレベルで出土している、他の地点から出土したものは覆土中出土であることから破棄されたものと考えられる。床面出土のものでは完形の打製石斧が3点出土している。（第43図38・42、第44図45）

遺構の時期は、出土した大木系（大木8b式）の土器などから、縄文時代中期中葉末～後葉前半ととらえられる。

出土遺物

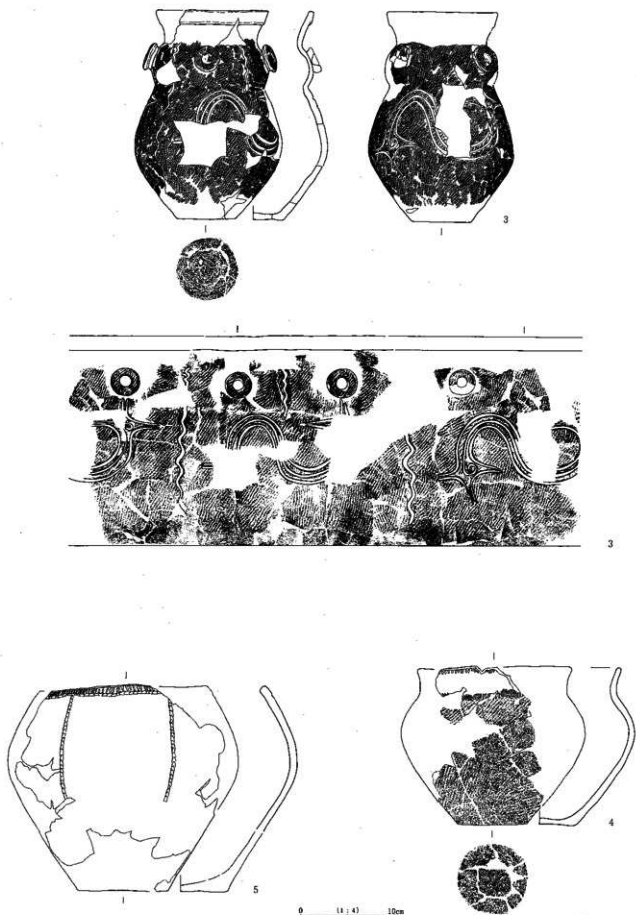
1は大型の深鉢で、口縁部には2つの大把手と1つの中把手が観察される。口縁の残部が半分ほどであるため推測の域を出ないが、類例からすると4単位の大把手に4単位の中把手が交互に配されていたものと考えられる。口縁部の下位には1.6～1.9cmの無文帯がめぐり、無文帯の下位には3条の平行沈線が施されている。3条の沈線の間はやや隆起している部分があることから粘土紐の貼付けが行われたことが考えられるが微少であり確証はない。平行な沈線より下は縦方向の複節RL縄文の地文の上に大きな3重の弧が描かれている。2は大型の深鉢で、口縁部付近には二重複縁の形跡が見られるが残存状況は悪い。胴部は1と同様、縄文地文の上に3条の沈線によって大きな曲線が描かれている。地文の縄文はRLの縦位（部分的に斜め）である。3は瓢箪形をした深鉢で、折返した口縁を持ち、肩部まで無文帯がめぐっている。胴部はRLの縦位（斜め）の縄文地文の上に1・2同様、3条を基本とする沈線により曲線のモチーフが描かれている。また、胴部の3ヶ所に1条の波状沈線が垂下している。胴部上位には4単位の突起が見ら



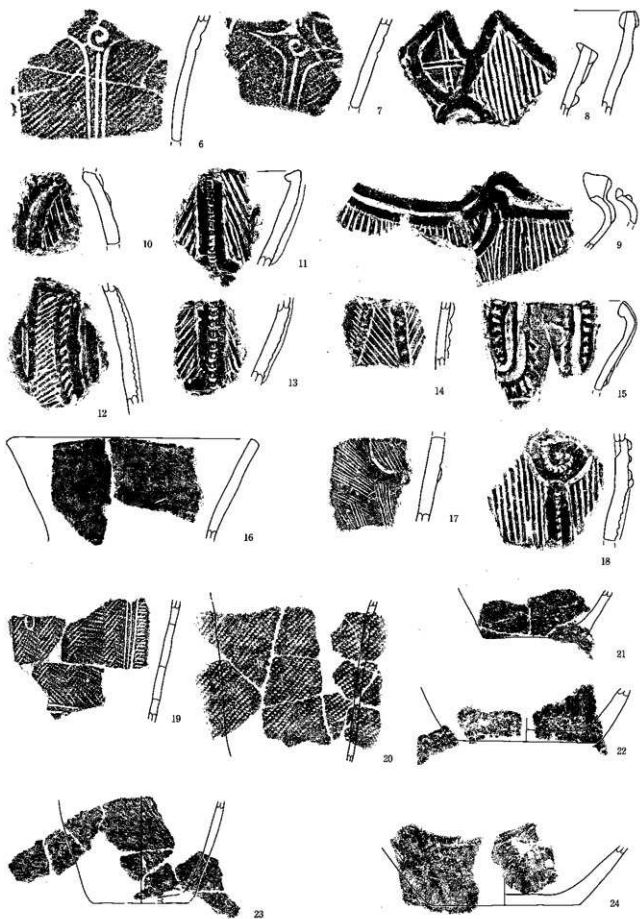
第10图 1号住居跡 出土遺物(1)



第11图 1号住居跡 出土遺物(2)



第12图 1号住居跡 出土遺物(3)



0 (1:2) 10cm

第13圖 1号住居跡 出土遺物(4)

れる。底部外面には栴瓦痕を思わせる凹みが1つ観察されている。4は、高さのない深鉢形土器で、口唇部と頸部に水平方向の連続する刻みが施されている。胴部はRLの縦文縄文が施される。5は、無文の鉢形土器で外面と内面下位には丁寧な磨きが施されている。口唇部には水平方向の刻み、直下には水平方向、口唇部から胴部にかけては垂直方向の連続刺突文が棒状工具により施されている。6と7は、地文にRLの縄文が縦方向に施された「扁平渦巻き弧文」で胴部は長胴となる一群と考えられる。8・9は、液状・平縁を呈する口縁部片で、肥厚する口唇部の下には隆帯に区画された中に縦文沈線文や十文字のモチーフの平行沈線文がみられる。10～11は隆帯の区画内を綾杉文・斜方向の平行な沈線が充填されるもの。16は、無文の口縁部。17は、隆帯の周りに櫛状の細線文が施される。18は、隆帯で描かれた渦巻きの内部に押し引きの刺突文が施されたもの。19は単節羽状の縄文上を平行沈線で区画している。横位の細かい平行沈線が見られる。20、RL縦位の縄文の施された胴部。21・22・24は無文である。23は、縄文地文が施されている底部である。

大木8b式併行土器や唐草文土器などから縄文中期中葉末～後葉前半、三上編年のⅡ期といえようか。

2号住居跡 欠番

3号住居跡 (第14～17図 PL3・13)

調査区のやや東寄り、R-6.7.12グリッドに位置する。

規模は長軸は5.0m、短軸は4.9m、検出面からの深さは最大で約60cmを測る。平面形は柱穴付近の外壁を頂点とする六角形に近い円形を呈する。主軸は炉および理窓の位置から西側に入り口部をとるW-10°・Sの主軸方向が考えられる。

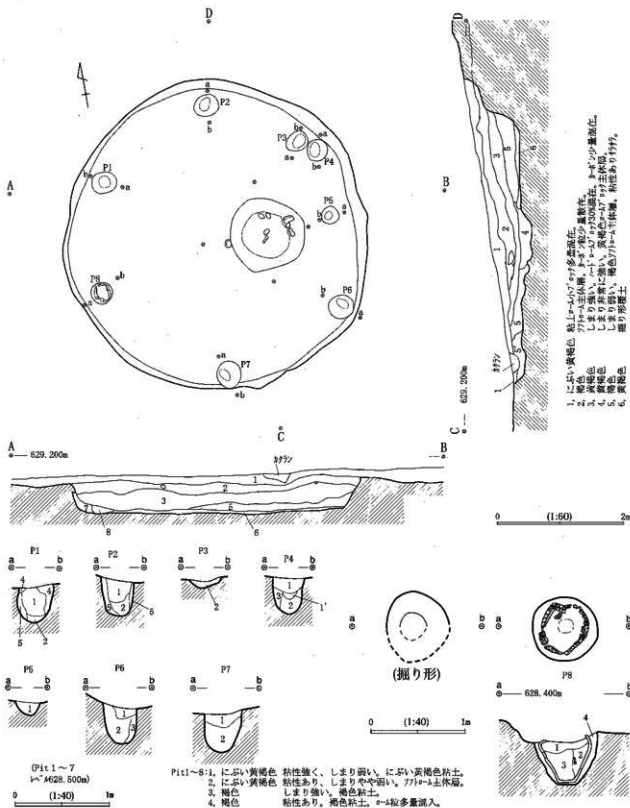
覆土の1層は遺跡全体に包含する褐色ソフトロームで、本跡が埋没してからの堆積と考えられる。2層以下が本跡にかかわる覆土で、7層(2～8層)に分層された。2層は黄褐色ロームブロックを混在する褐色ローム主体層で、中小の礫が含まれる。3層は炭化物粒子を多量に含む暗褐色粘質土で土器・石器を比較的多く包含する。3層下面ないし5層上面には焼土・焼土ブロックの集中が3ヶ所で検出され、2次堆積の段階で本跡が利用されたものと判断される。4層は炉にかかわる覆土であり、炭化物粒子が比較的多く含まれる。本跡の炉は、本来石組みであったものと捉えられ、石組みが廃棄される過程での埋没土が本層と考えられる。5～8層は本跡の1次堆積土であり、5層は褐色ロームと粘質土の混合層、6層は黄褐色ローム主体層である。炭化物粒子は比較的少なく、遺物も5層内で浮いた状態で出土した。住居跡南側は床面が軟弱であり、覆土もロームブロックとソフトロームが混在した締まりのない層(5'層)である。

壁はほぼ垂直に立ち上がり直下に周溝は認められない。

炉は住居跡中央部の東寄りに検出された。規模は120cm×112cm、深さは55cmを測る。平面は不整形方形で、掘り形のみが残存であった。石を抜いた痕跡や抜き取られたと見られる礫の破損品が出土していることから、本来は石囲い炉であったと考えられる。炉跡の覆土は1層からは焼土は検出されず、土器の小片が比較的多く混在し、3層下には厚い焼土ブロックの面的な広がりが検出された。焼土ブロックおよび比熱して硬化したロームは10～15cmの厚みがあり、使用頻度が高かったことが推測される。

床は貼り床であったが、掘り形は不明瞭で、ロームの叩き締めと数センチの粘土ロームによる床と判断した。床面の硬化は、炉周辺から理窓を結ぶ線とその西側で顕著で、南側は軟弱であった。

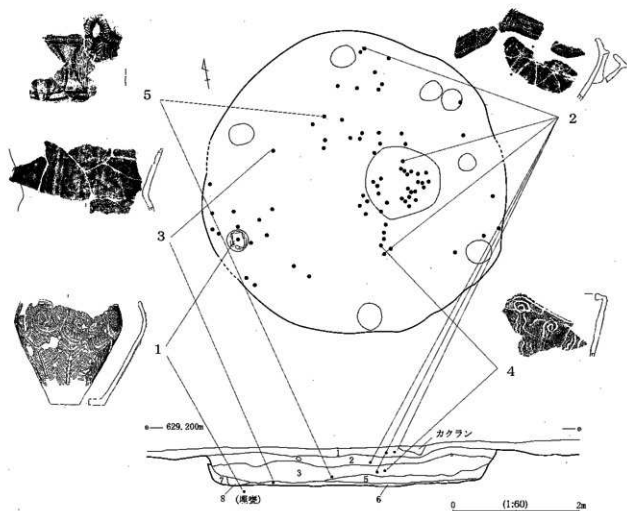
ピットは7基確認された。そのうちピット1・2・4・6・7は床面から37～40cmの深さを持ち、主柱穴と考えられる。主柱穴と考えたピットの覆土は5層に分層出来たが主柱穴の痕跡を明瞭に残したピットはなく、ローム小ブロックと炭化物粒子を少量含んだ黄褐色粘質土・ロームが覆土である。ピット1は貼



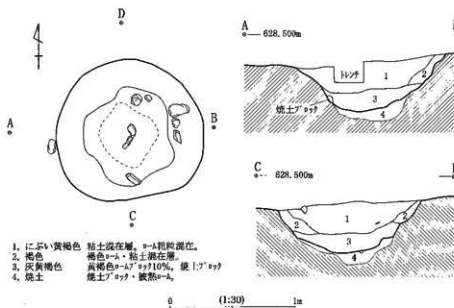
第 14 図 3号住居跡

り床、および埋め戻しの覆土が確認され（4層）1・2層が柱痕の可能性がある。

埋甕は住居跡南西部の位置に1基検出された。口縁部を欠くが、底部まで残存したほぼ完形の深鉢が正位の状態出土した。深鉢その物は周囲の根の影響で著しく歪められ、小破片となって取り上げられた。掘り形は直径35cmのほぼ円形で断面は播鉢状であった。埋甕内の覆土は3層に分層された。1層はロームの小ブロックや炭化物粒子を少量混ぜた黄褐色土で、2層は黄褐色ソフトロームで、埋め甕の小破片



第15図 3号住居跡 遺物出土状況



1. にぶい黄褐色 粘土盛在層、 η - δ 階状構造。
 2. 褐色 褐色 η - δ ・粘土盛在層。
 3. 灰黄褐色 黄褐色 η - δ ' η ' η '10%、焼1 η ' η ' η '
 4. 焼土 焼土 η ' η ' η '・炭灰 η - δ 。

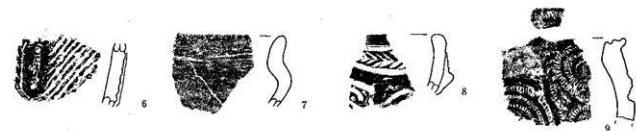
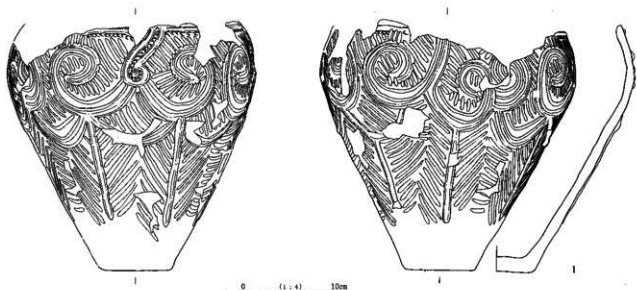
第16図 3号住居跡 炉跡

出土遺物

1はいわゆる楕形土器。口縁部は欠落するが口唇部はおそらく無文帯であったと思われる。地文は沈線の縦杉文で、その上に隆帯による渦巻文が施される。渦巻きの状態や縦杉文のくずれ方から、II期後半

が少量出土した。3層は炭化物粒子を少量・ロームブロックを含んだ褐色土である。2層覆土から埋窆内が空洞であった可能性が考えられる。

遺物の出土状況は土器片・石器の他特殊なものはない。遺物の出土分布は平面では炉周辺・埋窆周辺・北壁寄りに比較的多く、土層では3層内が最も多く含まれていた。完形に近い土器は埋窆の他には見られない。



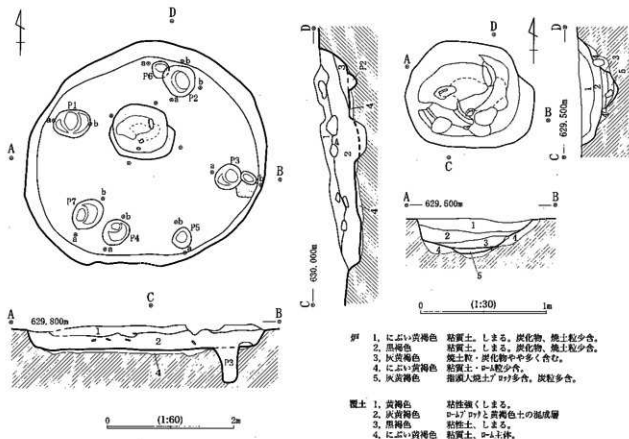
0 (1:2) 10cm

第17图 3号住居跡 出土遺物

からⅢ期（上三福年）に該当するものと思われる。2・3は東海地方の北屋敷式の口縁部・頸部片で同一個体と思われる。4は折り返し口縁部片で、波状にやや突出した部位と考えられる。地文に細線文が施され渦巻きのモチーフが沈線形で描かれている。5は下伊那特有の土器で断面三角形の隆帯で区画され細線文などが施される。6は綾杉文の地文の上に縦位の隆帯が施される。7は、無文の口縁部片である。9は口縁部下の隆帯と刺突による渦巻き文が、楕円区画によって横位にめぐっているものであろうか。2・3の北屋敷式や4・5の土器は1の埋裏より時代的に古い段階のものと思われるが、ここでは埋裏の深鉢からⅡ期の後半からⅢ期と捉えたい。

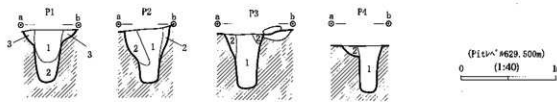
4号住居跡（第18・19・20図 PL 4・13）

調査区の中央のやや東寄り北から南に緩やかに傾斜する段丘縁、R-1グリッドに位置する。検出はソフ



- 層 1. にぶい黄褐色 粘質土。しまる。炭化物、焼土粒少含。
 2. 黒褐色 粘質土。しまる。炭化物、焼土粒少含。
 3. 灰黄褐色 焼土粒・炭化物を多く含む。
 4. にぶい黄褐色 粘質土・炭粒少含。
 5. 灰黄褐色 粗面人焼土が多少含、炭粒多含。

- 覆土 1. 黄褐色 粘性強くしまる。
 2. 灰黄褐色 P-17 P-7が黄褐色土の被成層
 3. 黒褐色 粘性土。しまる。
 4. にぶい黄褐色 粘質土。P-17様。



- Ph1 1. 灰黄褐色 粘質土硬くしまる。炭粒少含。
 2. にぶい黄褐色 粘質土。P-17が少量含む。
 3. にぶい黄褐色 粘質土。しまりなし。
 Ph2 1. 灰黄褐色 粘質土。P-17が少量含む。
 2. 灰黄褐色 粘質土。P-17が少量含む。
 Ph3 1. 灰黄褐色 粘質土。P-17が少量含む。
 2. にぶい黄褐色 粘質土。P-17が中や多く含む。
 Ph4 1. 灰黄褐色 粘質土。P-17が少量含む。硬い。
 2. にぶい黄褐色 粘質土。しまり良好。P-17が少量含む。
 Ph5 1. 灰黄褐色 粘質土。しまり良好。P-17が少量含む。
 Ph6 1. 灰黄褐色 粘質土。P-17が少量含む。
 Ph7 1. にぶい黄褐色 しまり強く、P-17が少量含む。

第18図 4号住居跡

トローム（基本土層のⅢ層）が覆い被さっていたため、困難を極め基本土層除去後のサブトレンチで検出した。

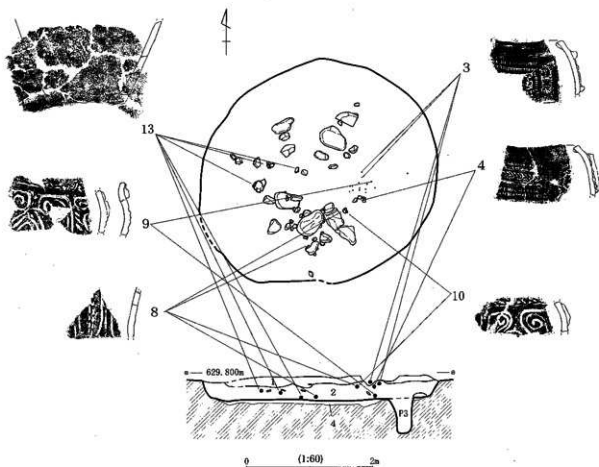
規模は長軸5.0m、短軸は南北方向で3.4m、検出面からの深さは50cmを測る。主軸はN-20°-Wを示す。平面形は東西に長軸を持ち傾斜方向に短軸をとる楕円形であるが、柱穴付近でやや角張るため5角形ないしは六角形の丸みを持った多角形とも考えられる。

壁はやや急な角度で立ち上がっている。

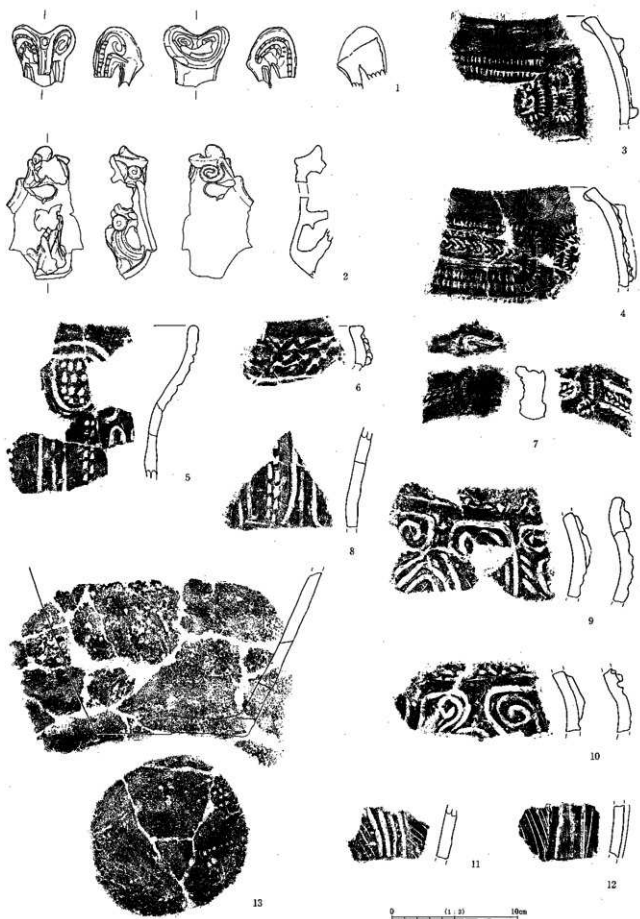
覆土は大きく3層に分けられ、最上層の1層は基本土層のⅢ層にあたるソフトローム層である。2層はローム粒子・ロームの小ブロックを含む褐灰色土で、暗褐色土の3層は北壁付近に観察された。1層は住居跡廃絶後の自然堆積と考えられる層で、2層は人為的に埋め戻したか、人為的な盛り土が流入した可能性がある。また、2層の覆土上部には多くの礫が出土しており、住居跡廃絶後、窪地として残存しその場所に礫を廃棄したことが考えられる。土器は小破片がほとんどであるが、2層から比較的多くの土器片・石類が出土している。

炉は住居跡中央北寄りに位置する。平面形はやや不円整形で、床面から約30cm掘り込まれている。底面は凹凸が著しく、被熱により赤化している。底面の凹凸は、礫を配した痕跡とも考えられる。炉の構造は本来、石囲い炉であったと思われる。

柱穴は7基確認された。その内のピット1～4が、規模や位置から考えて支柱穴ととらえられる。東西約1.9～2.0m、南北約1.7～1.8mの間隔で長方形に配置されている。いずれも上部が広がる断面形で床面から50～58cm掘り込まれている。ピット7は覆土に締まりがなく、断面の形状も柱穴とするには深



第19図 4号住居跡 遺物出土状況



第20图 4号住居跡 出土遺物

さがない。ビット5は非常に浅く柱穴とは考えられないが、炉との位置関係やビット3とビット4の中間に位置することから、入り口施設、あるいは埋堊様の用途に関係するものと予想される。

遺物の出土状況は土器片や石器が少量出土している。埋堊は認められなかった。

出土遺物

1・2は把手部分で、1では沈線内に刺突による刻みが入る。2は粘土紐の編み上げ（撚紐状隆帯文）や渦巻き文の貼付けによる。3・4は、内湾する口縁線で、いわゆる樽形土器である。横位に方形に近い楕円のモチーフ（横帯楕円列）が見られることから、三上編年のⅢ期に当たるものと思われるものである。5・8は、楕円・平行などの沈線で区画された中を刺突で充填する。下伊那系であろうか。9・10は隆帯で区画した中を沈線による渦巻きで埋めたもの。13は無文である。拓本では底面には縄、ないしはムシロ状の痕跡に見えるが、肉眼では植物の繊維とは考え難いことから、不明底部圧痕としておく。本跡の時期は横位区画された樽形土器の土器片からⅢ期と考えられる。

5号住居跡（第21・22・23図 PL5・14）

調査区の西端のQ-2・3、L-22・23グリッドに位置し、本跡の北東3mには1号住居跡がある。検出にあたっては、本跡上に大木の切り株が数本あり、それを除去しながら先行トレンチを設定し掘り下げた。この結果、壁の立ち上がりを捉えられたため平面調査に移った。

規模は長軸は5.05m、短軸4.95m、検出面からの深さは最大で55cmを測る。主軸は炉南側の炉石が扁平であることから、南側に入入り口部を持つS-20°-Wになると予想される。平面形は南西の床・壁が削平されていることから全体の形状は不明である。残存部分からすると北西・北東コーナーがほぼ直角に曲がることから隅丸方形が想定されるが、本跡に帰属するビット6・8が大きく南に飛び出ることから、南を頂点とする台形状の平面形の可能性も考えられる。

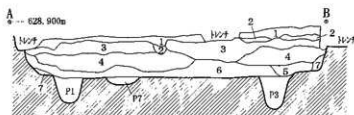
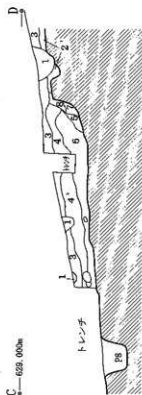
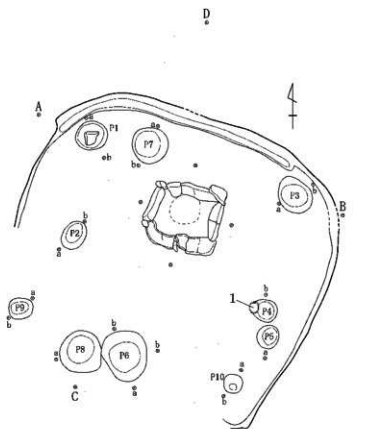
覆土の1層は表土・耕作土、2層は漸移層（暗褐色粘土）でロームと黒褐色土の混合層で、木根部の影響を受けている。1・2層は土器片や石斧類の出土が多いが、本跡本来の覆土と捉えられないことから2次的な遺物と考えられる。本跡の覆土の堆積土として捉えられる土層は4層以下で、大きく5層（4～8層）に分類された。4層はソフトロームを混在した灰黄褐色粘質土で、暗褐色粘土ブロックが多量に混入していた。遺物も比較的多く含まれ、人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。4層直下の床面上覆土の6層は、黄褐色ロームと粘質土の混合層で炭化物粒子が比較的多く含まれていた。5層は褐色ローム主体層で、暗褐色粘土ブロックを混入している。また、4層下部・6層中・上部には大小の円・角礫が散在することから、覆土下位の4～6層は埋め戻しによるものと判断される。本跡の埋没過程は、4～8層が遺構に直接かかわる覆土となる。その後、遺構の窪みに2次堆積層としての3層ソフトロームが堆積し、さらに1・2層が堆積したものと考えられる。3層の堆積状況は、現地形に並行する比較的均一な堆積を示すことから、本遺跡北側の斜面上部の土砂崩落の可能性が指摘できる。

床は貼床であったが、掘り形は不明瞭で、ロームを敲き締めた数センチの粘土・ロームによる床と判断された。床面の硬化は炉の周辺・北壁に続く面に検出されたが、南斜面側では確認されなかった。

残存する壁は立ち木の密集地区にあったことから所々その影響を受けているが、東西壁および北壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

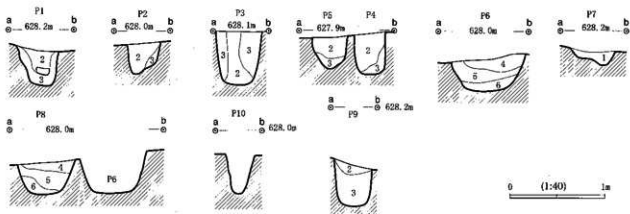
東・西及び北壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は南に傾斜する斜面であったため、削平により確認されなかった。

炉は住居跡中央部より北寄り（奥壁寄り）に検出された。構造は大型の自然礫を扁平に打ち欠いて四方を囲んだ石組である。東西にやや長い方形プランを呈する。炉石端の規模は東西1.3m、南北1.05mを



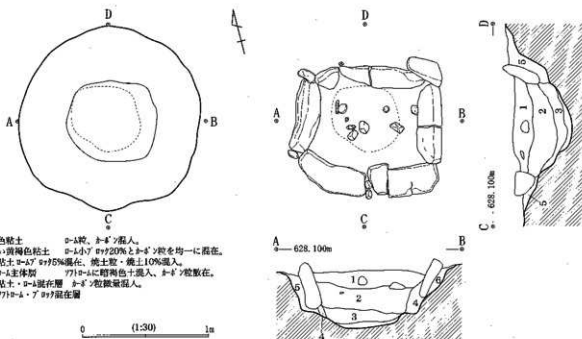
1. 黒褐色粘土 灰土・耕作土。
2. 暗褐色粘土 溝底層。
3. 暗褐色粘土 P-17より埋入。
4. 灰黄褐色粘土 褐色771P-A主体層。
5. 褐色771P-A主体層 771P-A跡左方。
6. にぶい黄褐色粘土 P-4よりP-1較りや多い。
7. 褐色771P-A主体層 4層よりP-1較りや多い。
8. 黄褐色P-57 P-7主体層 P-4よりP-1較りや多い。

0 (1:60) 2m



P11~10 1. にぶい黄褐色粘土
2. 暗褐色粘土
3. 褐色ローム主体層
4. 黒褐色粘土
5. 暗褐色にぶい黄褐色粘土
6. 暗褐色粘土
0-1小P-771P (0.5cm大) 覆在。P-4より埋入。
P-1跡左方。P-4より埋入。P-4より埋入。
771P-A主体層。P-4より埋入。P-4より埋入。
P-4跡左方。P-4より埋入。P-4より埋入。
P-4跡左方。P-4より埋入。P-4より埋入。
P-4跡左方。P-4より埋入。P-4より埋入。

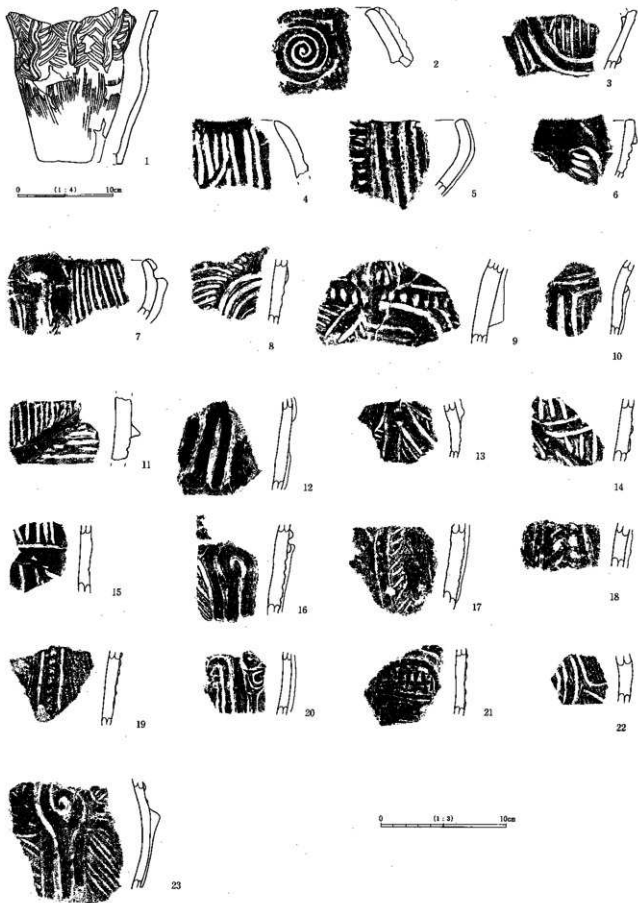
第21図 5号住居跡



第22図 5号住居跡 炉跡

測る。東・西の炉石はそれぞれ各1枚の扁平礫を使用し、奥壁（北側）には1枚の扁平礫と縦長の割石、焚き口（南側）には上面が平坦になるように三角礫が2個体設置されている。炉内の被熱は著しく炉石の破砕や底面の変色・硬化が顕著であった。覆土は6層に分層された。6層のうち炉内部の覆土が3層（1～3層）に、炉の構築に伴うものが3層（4・5・6層）の2種類に分類できる。1層は暗褐色粘質土、2層は黄褐色粘質土で炭化物粒子を少量含んでいるが、焼土は検出されなかった。3層は焼土粒子、焼土ブロックを含む褐色粘質土で奥壁よりに不整形の火床面が認められた。3層下には厚い焼土ブロックの面的な広がりが確認された。焼土ブロックおよび被熱して硬化したロームは平面が方形で、約10cmの厚みがあり、使用頻度が高かったことがうかがわれる。4層は東壁面のみを確認され、炉構築時の覆土と考えられる。4・5・6層は炉石固定のための覆土で、締まりの強い褐色ローム・粘土の混合層である。炭化物粒子を含まない6層とロームブロック・炭化物粒子を含む5層に分けられた。炉の掘り形は直径1.4～1.5mの円形である。炉石には硬砂岩・花崗岩を使用している。

柱穴及びピットは10基確認された。その内床面の残存する範囲から検出されたものはピット1・2・3・4・7の5基で、ピットの配置と床面からの深さから主柱穴に該当するものはピット1・2・3・4の4基と考えられる。ピットの深さはピット2が最も浅く40cm、ピット3が最も深く52cmであった。ピット1からは扁平な角礫が出土し、ピット4からは黒曜石と埋設された土器が出土した。ピット3の覆土は暗褐色粘質土（2層）が平面円形に堆積しており、柱根の可能性が考えられる。ピット7は底面に凹凸があり、不整形であることから木の根の影響を受けた可能性がある。床面外からはピット5・6・8・9・10の5基が検出されたが、ピット9は検出面から50cmと深く、形状・規模も本跡ピットに類似するが、覆土の3層に締まりがなく、また、ピット10は底面が先細りとなり、いずれも木の根の可能性が高いものである。他にピット5・6・8はいずれも床面硬化の弱い範囲から検出されたものであるが、位置的には本跡の範囲内と考えられることから、ピット6・8は出入り口あるいは埋塞埋設ピットに関係するものと判断される。ピット5は遺物の出土もあることから補助柱穴的な役割を持ったものと解釈される。ピット6・8の覆土はロームブロックを混在する埋め戻し土である。おそらく埋塞を埋設したものが出入り口に関わるものと考えられる。



第23图 5号住居跡 出土遺物

埋甕はそれ自体検出されなかったが、主柱穴ビット4からは口縁部と底部を欠いた小型の深鉢甕(第21図1PL)が逆位で1個体出土している。土器内部の覆土はビット覆土の2層と同じである。出入り口にあたると考えられるビット6・8の内部から土器の小破片が出土していることから、埋甕の可能性が考えられる。

遺物出土状況は、土器・石器の他、土偶(第51図1PL)の頭部破片が1点出土した。遺物は上層(1・2層)精査時から多量に出土し、4・6層からも土器片が均一に出土した。4・6層内出土の遺物平面分布は炉周辺が比較的多い。また、自然角・円礫が床面よりやや上の覆土中の炉周辺から南西にかけて散在していた。土偶頭部は炉東北脇の6層内から出土している(出土地点は図示できなかった)。土器・石器ともに分布に際立った偏在性は認められない。1の土器がビット4の際で出土している。

出土遺物

1は胴部下半は細線文、上半は沈線による綾杉文を地文としその上に縦位に波状の隆帯が貼付けられている。2は口縁部の隆帯による渦巻文。2～5・7・8・10・11・14～16は沈線文・綾杉文を隆帯によって区画した土器片。その中で、5は縦位隆帯が口縁部に施文されたもので、1より古い1期に該当する。9は下伊那によく見られ、綾杉文の地文の上に扁平で幅のある隆帯が横位に貼付けられている。

21は細い隆帯に区画された中をソウメン状の隆帯で充填している。垂下する肋骨文と水平方向の隆帯によって区画されている。

出土した土層は4・5・7・9・10・15・18が床面ないしは4層。8は炉跡出土である。时期的にはばらつきが感じられるが、II期(三上編年)と考えられる。

新6号住居跡(第24・25・27図 PL 6・14)

調査区の西寄りR2・3グリッドで確認された。この周辺は遺構の密集域で、7号住居跡が東に隣接し、南東では6号土坑と重複関係にあり一部6号土坑に壊されている。また、旧6号住居跡を壊している。また、旧6号住居跡の埋没途中にその痕跡を掘り起こして構築されたものと考えられる。

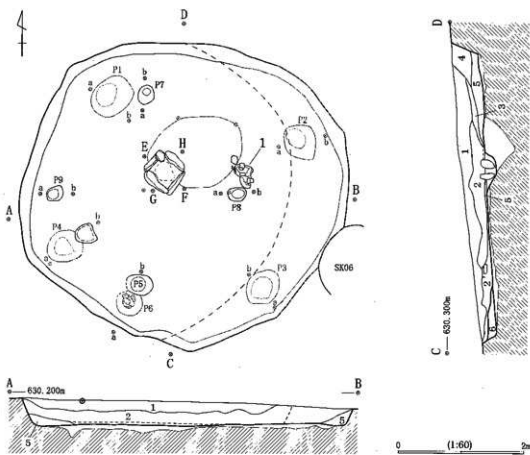
規模は、推測するところ長軸(南北)約4.5m、短軸(東西)約4.2mを測る。検出面からの深さは最大で約45cmを測り、平面形は西・南壁がやや直線的な不整な円形を呈するものと考えられる。主軸方向は柱穴の配置と炉の位置から南西に入り口を持つものと考え、N-46°-Eの方向が想定される。

覆土は上層に褐灰色土、下層にローム粒子を含む褐灰色土が堆積し、北側の一部に灰白色土が分布する。その下は非常に締まっていて堅い褐灰色土である。この内、1層は自然埋没土の可能性があり、2層は人為的に埋められた土層の可能性が高い。灰白色土はどのような経緯で本跡覆土中に入り込んだか不明であるが、ロームだとしてもかなり下層深い地点の所産であり、新6号住居跡の構築にあたって壁などに貼り付けられたものか、近接した地点の深さのある土坑が掘削された際に掘り出され住居跡内に持ち込まれたものと考えることが出来る。

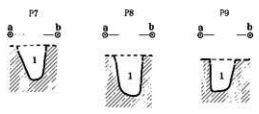
壁や床の詳細なところは不明であるが、床面は旧住居跡床面をあまり深く掘り起こさず、掘削面を平坦に整形した程度のものであると思われる。

壁は東半分近くは切り合いのため調査時点では明確にできなかったが、他の遺構の形態や旧6号住居跡の壁面から考えて、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がっているものと考えられる。

炉は石組み炉で、自然の扁平礫を用いて構築されている。1辺約50cmの方形に組まれたものである。掘り込みは浅く、炉の規模は比較的小規模である。炉中央部は浅い窪み状となり、底面は被熱により赤化している。掘り形の平面形状は隅丸の方形である。炉の覆土は1層が炭化物を少量混ぜる粘質土で、2層は焼土・炭化物粒子を多く含む粘質土であり、人為的な埋め戻しは感じられない。3層はロームブロック

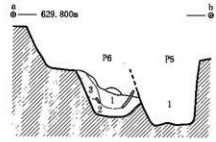
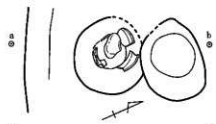


- 住居跡
- 1. 灰黄褐色 粘質土。しまり不良。
 - 2. 灰黄褐色 砂や多い。
 - 3. 灰黄褐色 砂土(粘土?)
 - 4. 灰黄褐色 粘質土。
 - 5. 灰黄褐色 粘質土。かたくしめる。



(Pit) #629.900m

0 (1:40) 1m



- P5 1. におい黄褐色
- P6 1. 灰黄褐色
- 2. 灰黄褐色
- 3. におい黄褐色
- P7 1. 灰黄褐色
- P8 1. 灰黄褐色
- P9 1. 灰黄褐色

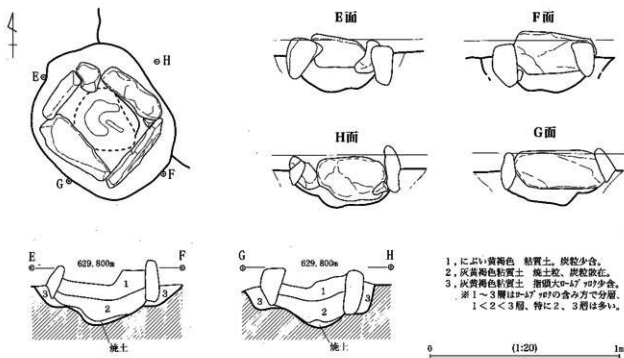
0 (1:20) 1m

第24図 新6号住居跡

を多量に混入する炉構築時に埋め戻された土層である。

出土遺物

1は左撚りの無節縄文を地文とし、胴部に渦巻きが施される。2は隆帯と沈線で渦巻きが施文されている。4は渦巻き状の隆帯で凹みに刻み目が施される。5は縦位の隆帯で地文に刺突が施されている。8は無文の底部片である。縄文の痕跡と思われるものが見られるが摩耗が著しく、判然としない。10は無文



第25図 新6号住居跡 炉跡

の縄文上に縦位沈線が施され、胴部中位には水平方向の隆帯が1条観察される。1の土器からⅢ期もしくはⅣ期の初期か。

旧6号住居跡 (第26・27図 PL 6・14)

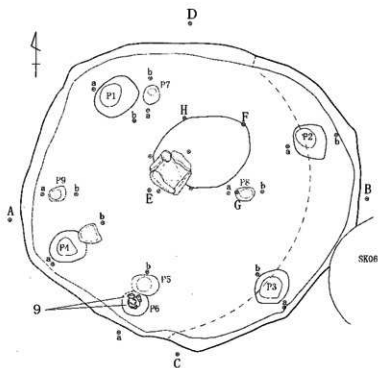
新6号住居跡と重複関係にあり、新住居跡にほとんどが破壊されている。南東部ではわずかに6号土坑に切られている。

規模は長軸(東西)5.1m、短軸(南北)4.8mを測る。検出面から床面までの深さは最大で約45cmを測る。平面形は柱穴(ピット1・4)周辺が角張るやや不整な円形(5角形?)で、床面については、新しく立て替えられた新6号住居跡の掘り形などの影響もあまり受けていないことから、新旧住居跡の床面のレベルは殆ど同じであったといえる。主軸方向は柱穴などの施設から、入り口は南西に位置するものと考えられ、炉跡との関係からN-12°-Eとなる。

炉については、新6号住居跡構築時の掘削のため残存度は低い。本来は石組みの炉であったと考えられるが、礫が部分的に残るのみで、ほとんどの石は住居跡廃絶時か新住居跡構築時に除去されたものと思われる。炉の掘り形の規模は東西約1.1m、南北約1.2mを測り、焼土の範囲は約80cm四方の方形となる。断面形は「V」字状を呈し、底面までの深さは60cm前後の深さを測る。石組みは残存していないが、炉の上縁部に配置されていたものと思われ、炉の底部は石組みがあったと思われる箇所から斜めに掘り込まれて中央が浅い溝状となる。その壁や底面などの内部は非常によく焼けており、地山のロームは被熱のため赤化が著しい。また、炉の覆土は大部分が焼土・炭化物を含んでおらず人為的な埋め戻しが想定される。

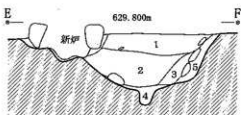
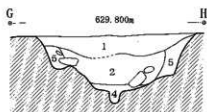
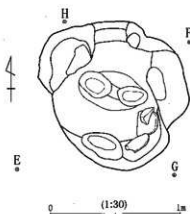
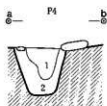
埋壙(第27図9PL)は本跡南寄りピット3・4を結ぶ線上の中央のピット6の土器が該当するものと考えられるが、位置的にはほぼ間違いないものと思われる。

出土遺物で図化できたのは9のみ



※覆土の土層は6号新住居を参照

0 (1:60) 2m

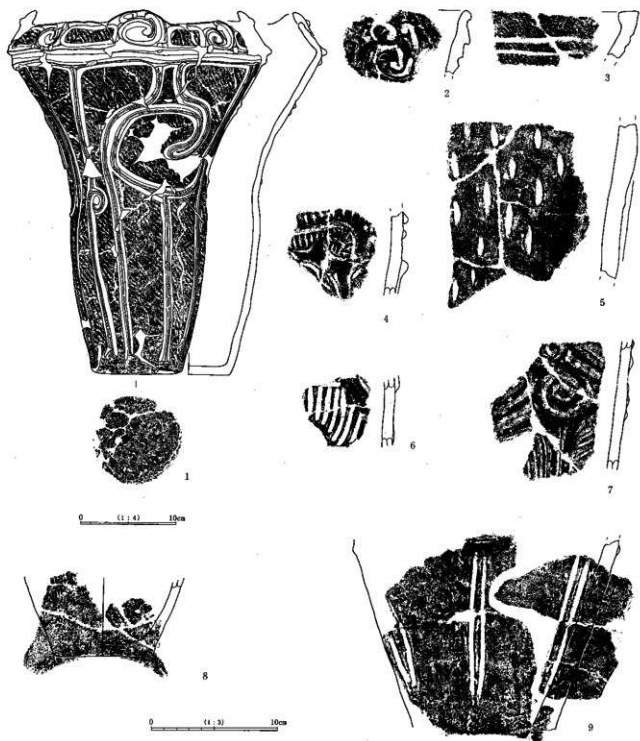


- 1, 灰黄褐色 粘質土。p-A粒少含、ややまり不良。
- 2, 灰黄褐色 粘質土しまる。焼灰粒、炭粒少含、p-A粒1cm大少含。
- 3, 灰黄褐色 同上、p-17pp多含(2cm大多)
- 4, 灰黄褐色 粘質土。糞土粒、炭粒多含。
- 5, 褐灰色 粘質土。p-A粒多含(粗方)

- 1, 暗黄褐色土
- 2, 黄褐色土 糞まりあり。

(P11) #629, 900a
0 (1:40) 1m

第26図 旧6号住居跡

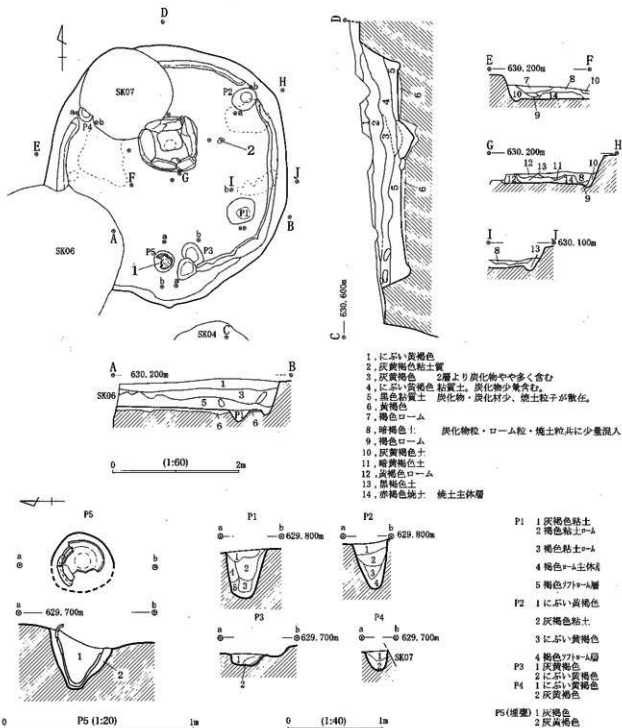


第27図 新・旧6号住居跡 出土遺物

7号住居跡 (第28・29・30図 PL 7・15)

調査区中央部のやや西寄りのR-3グリッドに位置する。新旧6号住居跡の西側に隣接し、南西部では6号土坑に切れ、北西部では7号土坑が入子状に入り壊されている。

規模は長軸(南北)4.1m、短軸(東西)3.9m、検出面から床面までの深さは最大で約60cmを測る。主軸は南側を入り口と考えてN-8°-Wと記録される。平面形は柱穴周辺がやや角張り、南壁中央部がやや突出した円形を呈する。



覆土の概略は最上位にⅢ層のソフトロームが載り、中位に褐灰色土、下位に炭化物・炭化材を大量に残す黒褐色土がある。1層は基本土層のⅢ層に由来するものであり、2・3層は黄褐色ロームをブロック状に混合することから人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。当層が住居の焼失に関わるものか、壁あるいは土屋根の崩落によるものなのかは判断できない。5層中に多く見られる炭化材の出土状況は、北側と東側に特に顕著であるが、いずれも短小規模なもので形状も判然としないものが多い。北側の壁寄りで見出されたものと東側の一部のものは住居跡の中央へ向かって放射状を呈しているように見えるが、それ以外のものは出土状況に規則性は感じられない。

壁はやや緩やかな立ち上がりで、入り口を除く部分には周溝がめぐっている。周溝は南側の入り口と考えられる突出部と北側のピット1とピット2の周辺で途切れる以外は全周している。溝の底部は平坦ではなく、所々に凹凸がある。

床面は黄褐色ロームを基調とした堅固なものである。全体的に南に傾斜している。床面上で確認された施設には柱穴3基（ピット1・2・4）、入り口付近の性格不明ピット（ピット3）、埋甕（ピット5）が挙げられる。

柱穴はピット1・2・4の3基が該当するが、柱穴の配置を考えると本来は4本であったが、6号土坑の重複によって消失したといえる。ピット3は入り口突出部にあることから入り口に関わるものとの見解が示せる。

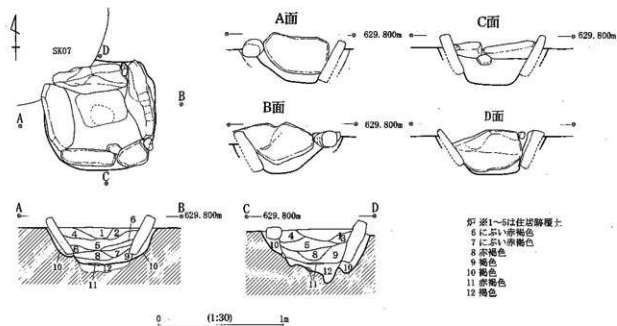
炉は床面中央より北側に検出された。石組みで、北・東・西は大きな平石を用い、南側には細長い礫を用いている。残存状況はおおむね良好といえる。規模・形状は約90cmの方形で、掘り形では隅丸の方形を呈し深さは約80cmを測る。覆土は最上層に住居跡の覆土の1層中地位層類似の焼土・炭化材をあまり含まない土が入り、その下位には住居跡の覆土5層に相当する炭化材・焼土粒子を多く含む土壌となる。さらにその下方には硬化した火床面がある。そして当炉の特徴として火床面の下には褐色土をはさんで焼土（火床）が観察された。2枚の火床が確認されたことから、炉の使用に際して灰の掻出しが行われたことを知ることが出来る。これについて住居跡の建て替えや重複も考えられたが、住居跡内の柱穴の検出状況などから否定される。

埋甕（第30図1 PL15）はピット5内正位の状態を確認された。埋納以前にはすでに口縁部は破損していたと思われる。

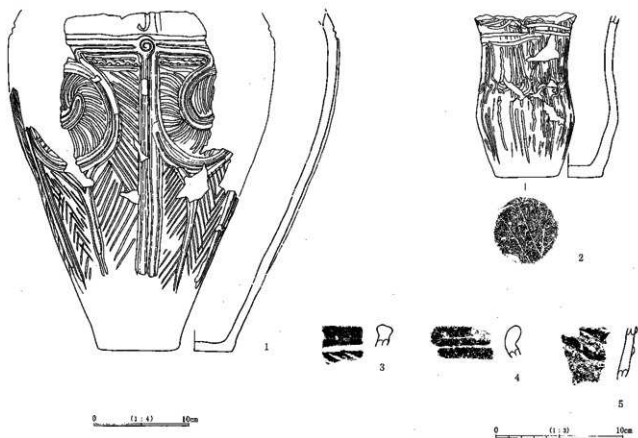
遺物出土状況は破片が少量で、埋甕以外に見るべきものは少ない。

出土遺物

焼失家屋のわりには遺物が少なく、1と2以外ほとんど見るべきものが無い。1はタル形土器でⅡ期かⅢ期に該当するものと考えられる。2は細線文の地文に縦位の沈線、胴部中位には2条の水平方向の沈線とその上には渦巻きを連想させる曲線の一部が観察される。



第29図 7号住居跡 炉跡



第30図 7号住居跡 出土遺物

8号住居跡 (第31・32図 PL 8・15)

調査区の東端 R8・9グリッドに位置する。本跡南側は浸食により削られ南壁は残存していない。

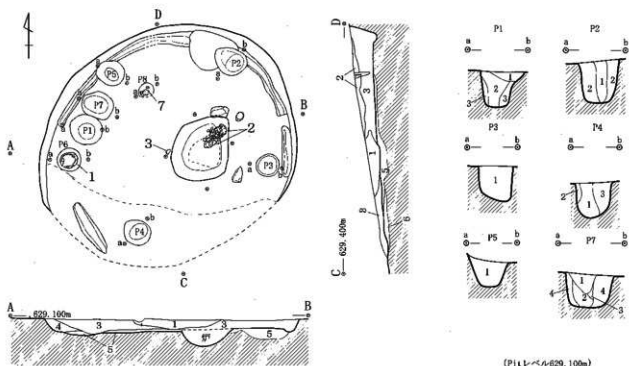
規模は長軸約4.3m、短軸約3.6m(推定)、検出面から床面までの深さは最大で約38cmを測る。(南側の床面は削平で消失しているが、掘り形の調査で掘り形の範囲が短軸方向に捉えられたことから短軸の長左はほぼ当時の大きさを示しているものと思われる。)平面形は楕円形で、主軸方向は入り口を南西に持つと考えればN-60°-Eとなる。

床は住居跡の南側が流失するものの北側の残存状況が良好で、黄褐色ロームを主体として堅く締まっている。

ピットは8基確認されている。ピット6は埋壺を伴うもので、ピット8はそれに類似するピットである。主柱穴の可能性が考えられるピットは1・2・3・4で長方形を形作り、規模は東西25~28m、南北1.8~2.0mを測る。ピット1と7は近接し位置的にも土層の状況も柱穴とするに値するものであるが、ピット7が床面除去後に検出されたという点からピット1を柱穴とした。ピット5は位置的な問題や土層の状況が調査区内でよく見られた木根の痕に類似することから、遺構に伴うものかどうか疑問が残る。

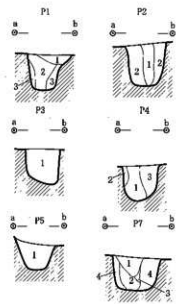
壁は比較的緩やかに立ち上がり、床面の残存する部分の際には周溝がめぐっている。

炉跡は本跡の中央東寄りに位置する。東西約1.1m、南北約1.1mの不整形円形を呈する。礫は残存しないが礫が抜き取られた痕跡などが認められることから、本来は石組み炉であったことが考えられる。覆土では4層と7層に火床と考えられる硬化した焼土面が確認されている。7号住居跡でも確認されたものであり、灰や炭の掻出しを考えることが出来る。炉の利用の仕方を示すものと理解される。



- (P1 レベル 629.100m)
1. 黒褐色粘質土
 2. にぶい黄褐色粘土
 3. にぶい黄褐色粘土 炭化物少量含む。
 4. にぶい黄褐色粘土 砂-A较多、炭化物少量。
 5. 黄褐色スラップ
 6. 褐色粘土

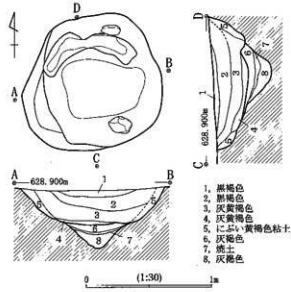
0 (1:60) 2m



(P1 レベル 629.100m)

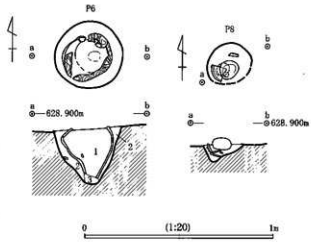
0 (1:40) 1m

- | | | | |
|----|----------------------------------|----|-----------------------------|
| P1 | 1. にぶい黄褐色
2. 灰褐色
3. にぶい黄褐色 | P5 | 1. 灰褐色
2. にぶい黄褐色 |
| P2 | 1. 灰褐色
2. 灰褐色
3. にぶい黄褐色 | P6 | 1. にぶい黄褐色
2. 褐色
3. 褐色 |
| P3 | 1. 灰褐色 | P7 | 1. にぶい黄褐色
2. 褐色
3. 褐色 |
| P4 | 1. 灰褐色
2. にぶい黄褐色
3. にぶい黄褐色 | P8 | 1. にぶい褐色 |



1. 黒褐色
2. 黒褐色
3. 灰黄褐色
4. 灰黄褐色
5. にぶい黄褐色粘土
6. 灰褐色
7. 灰土
8. 灰褐色

0 (1:30) 1m



0 (1:20) 1m

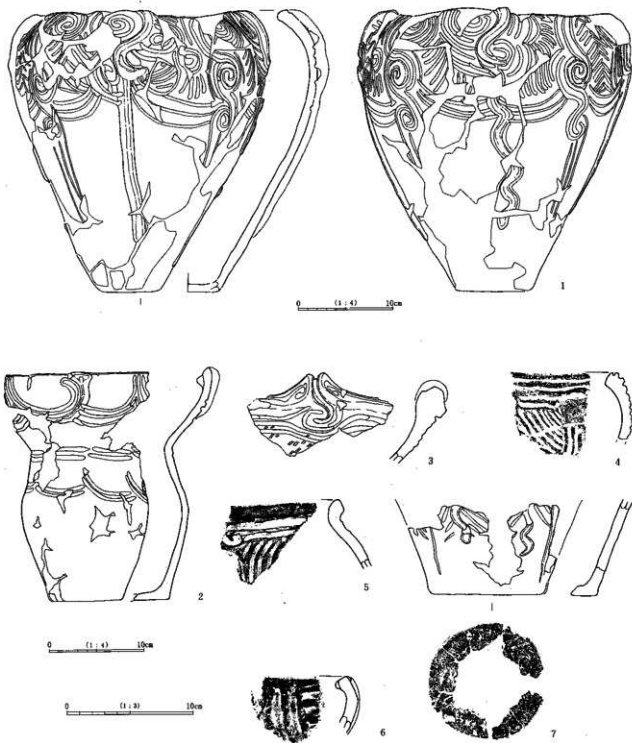
第 31 図 8号住居跡

埋壘は南西側の隙間ピット6内に正位で埋設されていた。また、床面を剥いだ時点で検出されたピット8には土器片が埋設され、その上に蓋をするように石が置かれていた。

遺物の出土状況は、2の土器は炉の上部から出土している。炉の廃棄状況から炉に伴うものか明確にできない。7はピット8から自然礫を乗せられた状態で検出された。埋納施設の種類と考えられる。埋壘・炉の遺物以外は接合関係が弱く覆土の出土量も少ない。

出土遺物

1はタル形土器で埋壘として埋納されていた。中期後半Ⅲ期に該当する。2は炉下伊那地方によく見



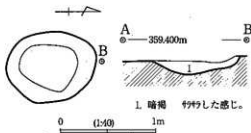
第32図 8号住居跡 出土遺物

られる連呼文をモチーフとした土器で、地文は無文である。6は縦位隆帯と横位にはしご状のモチーフを施文した下伊那に多く見られるものと思われる。隆帯の断面は三角形を呈する。7は波状の隆帯を縦位に施しその間を彩杉文で充填した深鉢の底部である。底面は打ち欠いた状態で出土している（底部穿孔か）。本跡の時期は一部古いものが見られるが、1の土器からⅢ期とする。

2 土坑

1号土坑 (第33図 PL 9)

調査区の北西角付近、1号住居跡の南に隣接したL-23グリッドで検出された。規模は長軸0.96m・短軸0.73m、深さ0.20mを測る。平面形は上縁部・底部ともにやや不整な楕円形を呈する。主軸はほぼ北を向いており、地形の傾斜にはほぼ直交している。壁は底部から緩やかに立ち上がる皿状を呈している。底面は平坦ではなく、やや凹凸が観察された。覆土は単層で暗褐色のしまり悪いローム混じりの土壌で、粘性は少なくサラサラした感じである。周囲の土坑状の攪乱 A、や倒木痕・抜根とはやや土壌の趣が異なるため取り上げたが、遺物も縄文時代中期の土器小片が少量出土したのみで、時期を判断出来るものではなく、遺構の確信は低い。



第33図 1号土坑

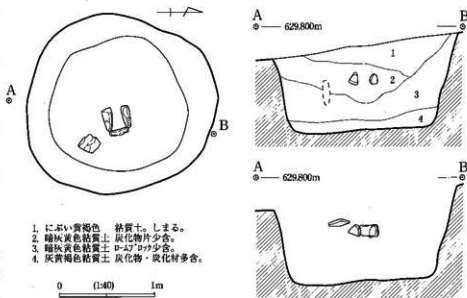
2号土坑 (第34図 PL 9)

調査区の東側、6号住居跡と3号住居跡にはさまれた位置のR-2・7グリッドで検出された。他の遺構との重複はなく単独である。規模は長軸2.03m・短軸1.90m、深さ0.97mを測る。平面形は上縁部・底部ともに南北方向に若干長い円形である。底面はほぼ平坦でやや硬度があるが、4号・6号・7号に比べると硬化度は低い。壁はその底部から急激な角度で立ち上がり上縁部に至る。短軸の傾斜に比べ長軸の傾斜の方がいくぶん緩やかである。全体の形状は筒形を思わせる円筒形である。

覆土と石組みについて：覆土は4層に分層された。底部にはほぼ均一の厚さで堅く締まった炭化物・炭化財を多く含んだ黄褐色粘質土の4層があり、その上にはロームブロックを含む3・2層。最上部には窪地として残存した部分に堆積したと考えられるにぶい黄褐色土がのっている。最下層の4層は4号・6号・7号土坑にも認められた土層であり、土坑の使用時に施設の一部として、あるいは埋納時に何らかの行為の結果として入った可能性が考えられる。中位土層の2・3層にはロームブロックが認められることなどから人為的な埋め戻しの

可能性が高く、2層中には石組みが構築されている。1層は窪地として残存したところに流入した自然堆積土の可能性が高い。

埋土中に見つかった石組みは長さのある円礫を「コ」の字状に配したものであり、その内部を半載した結果では焼けた痕跡・炭化物など何も認められなかった。焼土が含



1. にぶい黄褐色 粘質土。しまる。
2. 暗赤黄色粘質土 炭化物片少量。
3. 暗赤黄色粘質土 D-27 片少量。
4. 灰黄褐色粘質土 炭化物・炭化財多量。

第34図 2号土坑

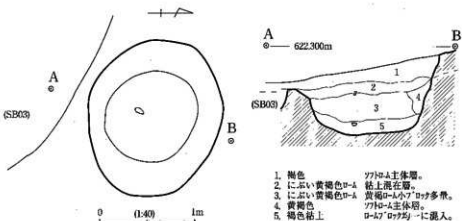
まれなことから炉跡の可能性は低く、何らかの祭祀か、通常の調査では認めることの出来ない物質が残存していた可能性もあるが、具体的な性格は不明である。本跡と類似した遺構に6号土坑があげられる。

3号土坑 (第35図 PL 9)

調査区のやや東寄り、3号住居跡の北東に近接したR7グリッドで確認された。重複関係はなく、単独である。規模は長軸1.65m・短軸1.40m、深さ0.85mを測る。底面はやや角張った円形を呈し、平坦でロームを敷き締めた床となり、硬化は顕著であった。底面中央部に自然円礫が出土したが、本跡とのかわりは不明である。壁は北側で垂直もしくは急激に外傾する。部分的にフラスコ状を呈する箇所があり、覆土の4層が壁面の崩落と考えればフラスコ形状の可能性もある。これら本跡の規模や形状から、集落に隣接した貯蔵穴の可能性が考えられる。

覆土は5層に分層された。1層は遺跡を包含する褐色ソフトロームであり、遺構壁面との分層はカーボン粒子の量で判断したが微妙であった。2層は3~5cm大の黄褐色ロームブロックを多量に含む粘土混在層で、3層はカーボン粒子と1~5cm大の黄褐色ロームブロックが均一に含まれた粘土層である。4層はカーボン粒子を少量混入したローム主体層、5層は粘土締まりの非常に強いローム小ブロック混在粘土層である。2・3・4層におけるロームブロックの混入度合からこれらの覆土が埋め戻し土と捉えられ、4層は壁崩落土とされる。つまり、本跡の2~5層は人為的な埋め戻しで、1層が自然堆積土となる。出土遺物は2・3層から土器の小片・黒曜石片など他の層より比較的多く出土しているが、2・3層は埋め戻し土と捉えられるので、本跡に直接帰属する遺物は無いと考えられる。

隣接して位置する2号・4号・6号・7号土坑と同時期に構築された遺構と判断される。6号・7号土坑の検出状況および出土遺物が住居跡より新しいと判断されることから、本跡も縄文時代中期後半に位置づけられるものと判断される。

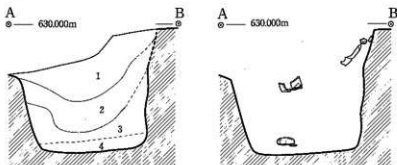
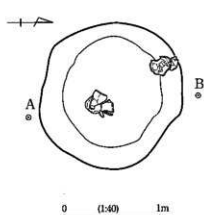


第35図 3号土坑

4号土坑 (第36・37図 PL10・15)

調査区の東端、7号住居跡と8号住居跡にはさまれたR3グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はなく、単独である。周囲には形状の類似する3号・6号・7号土坑があり、調査区内の遺構全体を見ると、これらの土坑と関連をもちながら群を形成しているように見受けられる。規模は長軸1.60m・短軸1.54m、深さ1.24mを測る。平面形は上縁部はやや不整な円形、底部の平面形はほぼ円形、全体的に円筒形を思わせる形状を呈している。壁はやや凹凸を持ちながらも直角に近い急角度で掘り込まれている。

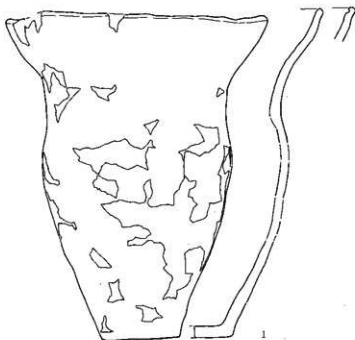
覆土は大きく4層に分層される。1層は、炭化物粒子を少量と小ロームブロックを多量混入するあまり締まりのない覆土である。1層の土坑上縁部と同じく1層の底面で同一個体のほぼ完形な土器が出土している。1層底面では口縁部・胴部が、上縁部からは底部・胴部が出土していることから、1層が埋まる過程の中で何らかの理由で倒立するような形で埋没したことがうかがえる。中位の2・3層はローム粒子を



1. 暗灰黄色粘質土 粘質土。炭化物片少含。アロパナの混在。
2. オリーブ褐色 1・3層よりやや明るい。土質は、1層に同じ。
3. 暗灰黄色粘質土 かなり少まる。炭化物片少含。
4. 灰黄褐色 かなり少まった暗褐色土。

第36図 4号土坑

含むやや縮まった層である。最下層4層にはほぼ均一に分布する非常に堅く締まった褐灰色の土層が認められる。土坑中央の4層の直上前後で平石が出土しているが、同様の例は7号土坑でも認められ、何らかの施設の一部あるいは行為の結果もたらされたものと考えられる。つまり、土坑最下層の4層は土坑使用時の所産であり、その後、2・3層が堆積し、最後に窪地として残存した時に土器が廃棄されたとともに1層が堆積したと考えることも出来る。規模・形状から、縄文時代中期後葉の貯蔵穴の可能性が考えられる。

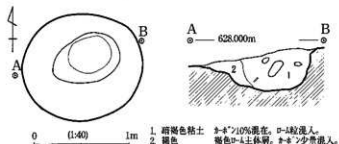


第37図 4号土坑 遺物

5号土坑 (第39図 PL10)

調査区西寄りの傾斜地 Q-9 グリッドに位置する。重複関係はなく、単独である。規模は長軸 1.23m・短軸 1.05m、深さ 0.44m を測る。平面形は上縁部で楕円形を呈するが、中央部は卵形に落ち込んでいる。壁は東側が急傾斜で、西側が緩く掘り込まれている。底面は擋鉢状で平坦ではない。

覆土は2層に分層された。1層はカーボン粒子・ローム粒子を混入する暗褐色粘土層で、2層は褐色ソフトローム層である。遺物は1層中から小角礫・円礫が

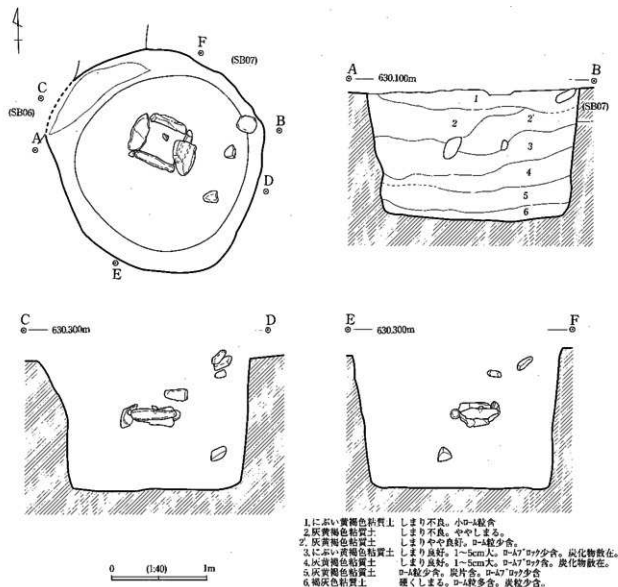


第38図 5号土坑

出土し、土器片が散在していた。2層からの出土はない。2層は遺跡全体(遺構確認面より上に堆積している)に広がる褐色ソフトローム層で、遺物を伴う覆土が上部に堆積していることから、本遺跡の集落にかかわる遺構群より新しく築かれたものと考えられるが詳細な時期は不明である。

6号土坑 (第39図 PL10・11)

調査区の東端でのR3グリッドに位置する。7号住居跡と重複し6号住居跡と接している。土層の観察から本跡が7号住居跡の床面を壊していることが観察された。6号住居跡との関係では接点が小さいものの、6号住居跡の壁の観察から本跡が6号住居跡を壊していることが判明した。以上のことから、本跡は6号・7号住居跡より新しいことが確認された。規模は長軸240m・短軸230m、深さ134mを測る。平面形は北側がやや張り出した円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁直下の底部は角張り底面は平坦である。全体的な形状は円筒形を呈する。底面は非常に堅いが、底面の位置する深さには非常に堅いローム層が広がっており、人為的に敷き締められた結果硬度を増したのかローム層の硬度なのかは判断できなかった。

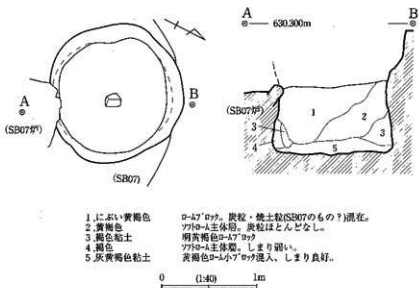


第39図 6号土坑

覆土は6層に分層された。大きくは4つに分類できる。底面上には4号・7号土坑同様堅く締まった褐灰色土が均一に堅さで堆積している。その上にはロームブロックを含む人為的な埋め戻しと思われる5～3層が認められる。3層上には石組みがあり、その上にはあまり締まりのない2層がのっている。この2層もわずかながらローム粒子を含んでおり、人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。1層に関しては2層よりさらに締まりがなく、ロームブロックを混入することから他の2層同様、人為的な埋め戻しが考えられる。3層上面に設けられた石組みは3本の自然礫と1本の石棒(第9図 PL)を用い、住居跡の石組みの炉といっても過言ではないほど類似した形状・規模である。それら4本の礫を除去した後、石組みの下を半截し観察した結果、覆土に本来的に混入していたと思われる炭化物等が散在しているのは認められたが、通常住居跡の方に見られるような焼土・炭化物、硬化面などは認められなかった。1層中にも自然礫が数点確認されたが、人為的に何らかの目的を持って廃棄されたかどうかは不明(人為的な印象は少ない)である。また、下位の土層からは7号住居跡の覆土から崩落したと考えられる炭化物・炭化材が認められた。

7号土坑(第40図 PL11)

調査区の北東端のR-3グリッドに位置する。7号住居跡と重複する。本跡は7号住居跡の中に完全に入り状になっていたため、調査中は住居跡の床面確認時まで気づかず土坑上半を破壊してしまった。新旧の重複関係は本跡部分で7号住居跡の床や炭化材が見られなかったことから、本跡の方が新しいと考えられる。規模は長軸1.50m・短軸1.43m、深さ1.30mを測る。平面形は上端部は7号住居跡の調査時に壊されているため不明であ



第40図 7号土坑

るが、残存部分からほぼ円形であったことがわかる。底面はほぼ平坦で、壁は底部の角から急激に内側に張り出しながら立ち上がり、中位からは上縁端部にかけてやや広がるようであるが、上部は推測の域を出ない。いわゆる、フラスコ状を呈するものと思われる。

覆土は粘性と締まりが強く、黄褐色のロームをブロック状に混入し、焼土粒子・炭化物粒子を少量混ぜた土層で、底面に対しほぼ水平に堆積している。2層と4層はローム層が主体となって構成されていることから壁面の崩落によるものか、あるいは人為的なものの可能性が考えられる。1層はロームブロックを混入することから人為的な埋め戻しが想定される。また、1層中に炭化材や炭化物粒子を含むのは、7号住居跡の覆土のものと考えられる。出土遺物はごく少量なため時期を決定するまでには至らない。あえて覆土の様子から縄文時代中期と考えられる。

第3節 土偶・土製品 (第53図 PL24)

1～3は頭部である。1は5号住居跡の覆土から出土している。頭頂部は扁平で中央がやや盛り上がり、頭髪を思わせる沈線が観察される。2は4号住居跡の覆土からの出土で、1に比べやや丸身を持つ。頭髪を思わせる沈線は棒状工具の連続押し引きにより施されている。3は遺構外出土。頭髪は細い隆帯と沈線の組み合わせで施されている。1～3のうち中空が認められたのは3のみであるが、爪楊枝程の細い棒の痕跡が認められるのみである。4は胴部の主に腹部片である。3号住居跡の床面に近い覆土から出土している。5は腹部から臀部にかけての破片で、遺構外の出土である。6は臀部片で8号住居跡の2層から出土している。7は胸部から腹部にかけての胴部片で4号住居跡から出土している。左側の乳房は剥落している。8・9は足部で両者とも右足部である。8は3号住居跡の床面上の覆土出土で外側のくるぶし部分に沈線状の凹みが認められる。9は同くるぶし部分に縦位の隆帯が施されている。遺構外の出土である。中空部分が認められるのは頭部の3以外では7と9のみであった。

土製品では土鍾が3号住居跡から1点出土している。

第4節 石器・石製品 (第41～52図 PL16～24)

磨製石斧 (1～14)

1～5は定角式、6～10は乳棒状の磨製石斧である。1は蛇紋岩製である。非常に丁寧に研磨されており、全体に擦痕が観察される。刃部の破損後も使用されており、破損面の磨耗・裏面の刃先の擦痕が顕著である。2は緑色片岩製である。刃部欠損後も研磨を施しており、また柄り状の部分には微細剥離痕が見受けられ、再利用されたと考えられる。3・4は刃部を欠損している。全体は丁寧に研磨されており、擦痕も顕著である。破損後の再利用は認められない。頭部は稜を作出している。3は粘板岩製、4は緑色片岩製である。5は粘板岩製で、偏刃である。丁寧に研磨されており、頭部は稜を作出している。刃部には微細剥離痕が見受けられる。6は凝灰岩製であり、基部を欠損している。折れ面・両側面・表面中央部には敲打痕が顕著に見受けられ、破損後は敲石として使用されたと思われる。刃先にも敲打痕や剥離状痕が見受けられる。7は緑色片岩製であり、棒状礫を素材としている。表面・両側面には成形過程における敲打痕が顕著であり、整形の研磨は刃部付近のみに施している。刃部は欠損しており、上下両端に敲打痕が見受けられることから、破損後は敲石として再利用されたと考えられる。8は成形における敲打痕が顕著であり、研磨は実測図表面の下部と裏面に施されている。刃部を欠損しており、先端に敲打によるつぶれが見受けられる。ホルンフェルス製である。9はホルンフェルス製であり、刃部を欠損している。成形における敲打痕が顕著であり、表裏面には研磨による平坦面が見受けられる。折れ面は磨耗が観察され、破損後は磨石として再利用されたと考えられる。10は砂岩製であるが、全体の風化が顕著である。基部を欠損している。11は節理で縦割れをおこし裏面を欠損している。欠損後、両側面と上部に調整剥離を施している。表面は研磨が顕著であり、刃部には擦痕が見受けられる。緑色片岩製である。12・13は扁平な礫を素材としている。両側面には敲打痕が見受けられる。12は砂岩製で、13は凝灰岩製である。14は凝灰岩製であり、刃部を欠損している。両側面には成形における敲打痕が顕著であり、表裏面は研磨されている。裏面上部には両側面とは色の異なる敲打痕が見受けられ、破損後の再利用であると考えられる。

打製石斧 (15～56)

打製石斧は考古学で一般に使用されている形態では、15～45が短冊形、46～54が撥形、55・56は欠損のため不明である。本遺跡ではさらに次の分類を試みた。1.側面の加工において、ハードハンマーを

用いて垂直打撃を施し刃潰し状の側面を作出しているもの(15~18)。2.表裏面からの整形剥離の後、側面に敲打を施した痕が顕著なもの(19~21・46)。3.側面につぶれ状の磨耗が見られるもの(22~36・47~50)。4.表裏面からの整形剥離によって側面の稜がはっきりしているもの(37~45・51~54)である。全体的に成形・整形・刃部加工はハードハンマーによる直接打撃で施されている。

15は砂岩製の扁平な礫を素材としている。刃部は使用によると思われる磨耗が見受けられる。表裏面においても広い範囲で磨耗が観察される。垂直打撃による剥離と若柄によると思われる稜のつぶれが見受けられる。16は砂岩製の横長剥片を素材としている。形状は細身で左側面に内湾しており、垂直打撃は主に左側面に施している。17は砂岩製の横長剥片を素材としており、刃部を欠損している。非常に肉厚であり、刃部・基部に磨耗が見受けられる。19は砂岩製の扁平な礫を素材としている。刃先には使用による微細剥離痕と敲打痕が、表裏面には広い範囲で磨耗が見受けられる。20は粗粒砂岩製の横長剥片を素材としており、刃部を欠損している。21は砂岩製の剥片を素材としており、表裏面において広く磨耗が見受けられる。敲打痕は右側面の方が集中して施されている。22・24は砂岩製の横長剥片を素材としており、基部を欠損している。22の刃部は使用による磨耗が見受けられる。23は凝灰岩製の横長剥片を素材としており、刃先に磨耗が見受けられる。25は凝灰岩製の横長剥片を素材としている。刃先に微細剥離痕が見受けられ、主に基部の表裏面の稜線が磨耗している。26・35は砂岩製の扁平な礫を素材とし表裏面の広い範囲で磨耗が見受けられる。27・30は粗粒砂岩製の横長剥片を素材としており、基部を欠損している。28は凝灰岩製の横長剥片を素材としており、刃部を節理で欠損している。基部は表裏面で磨耗が見受けられる。29は砂岩製の扁平な礫を素材とし、刃部を欠損しているが、完形は小形な石斧と推定される。31は凝灰岩製の横長剥片を素材としており、刃部の使用による擦痕・磨耗が顕著に見受けられる。32・34は砂岩製の剥片を素材としており、刃部に擦痕・磨耗が観察される。34は裏面の磨耗が顕著である。33は緑色片岩製の剥片を素材としており、刃部と表面に磨耗が見受けられる。36は砂岩製の剥片を素材としており、基部を欠損している。表面は原礫面であり、成形加工の剥離は見受けられない。完形は比較的大形と推定される。37・46は砂岩製であり、刃部は使用による擦痕・磨耗が顕著である。38は礫岩製の横長剥片を素材としており、丁寧に整形加工を施している。39は砂岩製の横長剥片を素材としており、基部を欠損している。刃部には磨耗が顕著に見受けられる。41・42は粗粒砂岩製であり、刃先に微細剥離痕が見受けられる。43は砂岩製の横長剥片を素材としており、偏刃である。表面・刃部には磨耗が顕著に見受けられる。44は砂岩製、45は緑色片岩製であり、刃部を欠損している。47・49・53・54は砂岩製であり、刃先には微細剥離痕が見受けられる。48はホルンフェルス製の横長剥片を素材としており、風化が著しい。50・51は横長剥片を素材としており、基部を欠損している。50は表裏面の稜線、51は刃部の磨耗が見受けられる。52は粗粒砂岩製であり、基部を欠損している。55・56は砂岩製の剥片を素材としており、基部を欠損している。表面には敲打痕が見受けられ、破壊後の再利用が考えられる。

横刃型石器(57~99)

横刃型石器は中部高地の中期の遺跡で多量に見出される石器であるが、本遺跡においても多量に出土した。本遺跡における形態分類は、形状での分類ではなく、調整による分類を試みた。1.横長剥片を素材とし、左右側面の一方、もしくは両方から背面の原礫面に一打撃を行っているもの(57~63)。2.横長剥片を素材とし、左右側面の一方、もしくは両方に抉り状の剥離を施しているもの(64~66)。3.素材剥片に厚みがあり、上部の厚みを調整によって除いているもの。ただし、素材剥片剥離前の剥離と区別のつかないものは含めない(67~74)。4.刃部の厚みを調整によって除いているもの(75~84)。5.全周にわたって調整を施しているもの(85~90)。6.ほとんど調整を行わず、素材剥片の鋭い辺を刃部にしている

もの(91~97)である。

57~63は砂岩製の横長剥片を素材としている。57・59~62は右側辺、58は左側辺、63は両側辺から、素材剥片を剥離した後に表面の原礫面に一打撃を加えている。60・61以外は全周にわたって調整を施している。57・59~61・63は刃部に微細剥離痕が見受けられる。64~66は砂岩製の横長剥片を素材としている。64は両側辺の裏面に、65は左側辺の表面に、66は右側辺の裏面に抉り状の剥離を施している。刃部に微細剥離痕が見受けられ、65には擦痕も観察される。67~71・73・74は砂岩製の横長剥片を、72は砂岩製の扁平礫を素材としている。67・72は主に表面の原礫面の上部を、後は裏面の上部を調整し厚みを除いていると考えられる。69~71・73・74は刃部に微細剥離痕が見受けられる。75~84は横長剥片を素材としている。刃部の調整は、75~78・83は表裏両面に、79~82・84は主に裏面に施している。77の上部の調整は素材剥片を剥離する以前の剥離の可能性も考えられる為、分類3から除いた。79・80・82~84は刃部に微細剥離痕が見受けられ、83は表面刃部に、84は裏面に磨耗が観察される。81は風化が著しい。75~78・80・82・83は砂岩製、79は凝灰岩製、81はホルンフェルス製、84は粘板岩製である。85~90は砂岩製の横長剥片を素材としている。85~89は裏面、90は表裏両面のほぼ全周にわたって調整を施している。85~89は微細剥離痕が見受けられる。91~97は横長剥片を素材としている。91~96は刃部に微細剥離痕が見受けられ、96は裏面に磨耗が観察される。93は風化が著しい。91・92・94・97は砂岩製、93・96は粘板岩製、95は凝灰岩製である。98・99は上部を欠損しており、刃部には微細剥離痕が見受けられる。砂岩製である。

石匙(100~107)

中期以後に中部・関東以西の地域で見られる大形で粗製の縦型の石匙である。103・106は刃部の一部を欠損している。105は微細剥離痕が見受けられる。106は赤化が著しく、裏面には煤状付着物が観察される。100~105・107は砂岩製、106は珪岩製である。

石錐(108~112)

すべて黒曜石製である。108・109は凹基であり、脚部を欠損している。調整はソフトハンマーの押圧剥離で施しているが、109の調整は粗い。110は凹基であり、調整はハードハンマーの押圧剥離で粗く施している。111は平基である。調整はソフトハンマーの押圧剥離で施しているが、粗い。112は先端と脚部を欠損している。調整はソフトハンマーの押圧剥離で丁寧に施されている。

石錐(113) 上部を欠損している。断面形状は三角形であり、錐部は長い。チャート製である。

挟入石器(114) 黒曜石製の不定形な剥片を素材としている。抉りは、右側辺は表面側に、左側辺は裏面側にソフトハンマーの押圧剥離で細部調整を施し作出している。

削器(115) チャート製で、表裏両面から側縁に調整を施し刃部を作出している。左側辺には原礫面を残置している。

二次加工のある剥片(116~117)

116は横長剥片を素材としている。裏面には原礫面を残置している。117は不定形剥片を素材としている。刃部は鋸歯状を呈する。上部には微細剥離痕が見受けられる。2点とも黒曜石製である。

凹石(118~124)

118・119は表裏面中央に2つの凹みが重複している。また全周にわたって敲打痕が見受けられ、また119は裏面の磨耗が顕著である。120・121は表面に浅い凹みが見受けられる。磨耗・敲打痕も観察される。122は表面中央に2つの凹みが見受けられる。表裏両面は磨耗が顕著であり、裏面には敲打痕も観察される。123は表裏面中央に浅い凹みが見受けられる。直方体の礫の縁辺に敲打痕が観察される。124は表裏面の

中央に2つの凹みが見受けられる。全面が磨耗しており、上下面の敲打痕が顕著である。118～122は花崗岩製、123は砂岩製、124は安山岩製である。

敲石 (125～127・131)

125は上下面に敲打痕が観察され、全面に擦痕・磨耗が顕著である。126は上下面・表面・右側面の一部に敲打痕が観察され、擦痕・磨耗も顕著である。127は縁辺・裏面に敲打痕が観察される。凝灰岩製である。131は表裏面に凹みが見受けられ、上下面に敲打痕が観察される。

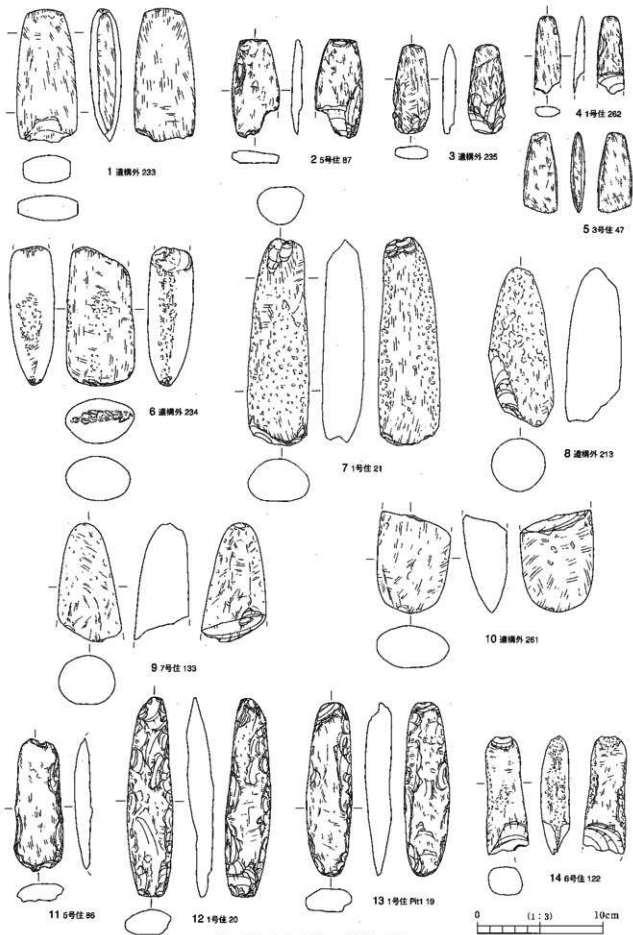
石皿 (132～137)

135はほぼ完形、後は欠損している。136は縁を持たないが、132～135・137は縁があり、磨面が明瞭である。135は三方に縁を持ち、一方は開いている。また、裏面には複数の凹みや敲打痕が見受けられる。137は擦痕が顕著に観察されることから、石皿の破片を砥石として再利用したと考えられる。

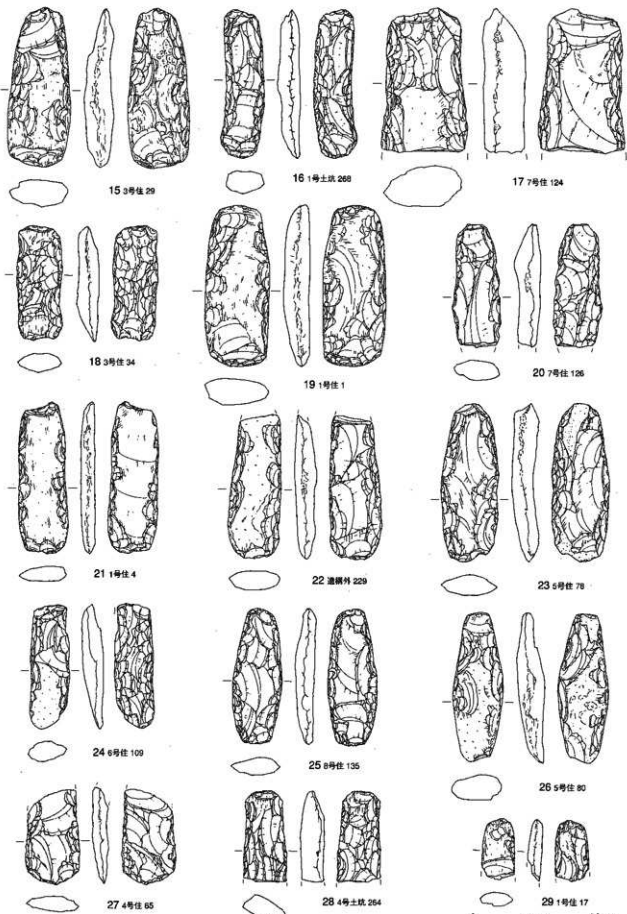
台石 (138・139) 138は使用面が明瞭である。

石錘 (140～155) すべて礫の両端に打撃を加え、抉りを作出した礫石錘であり、比較的、大形である。154の裏面には炭が付着している。

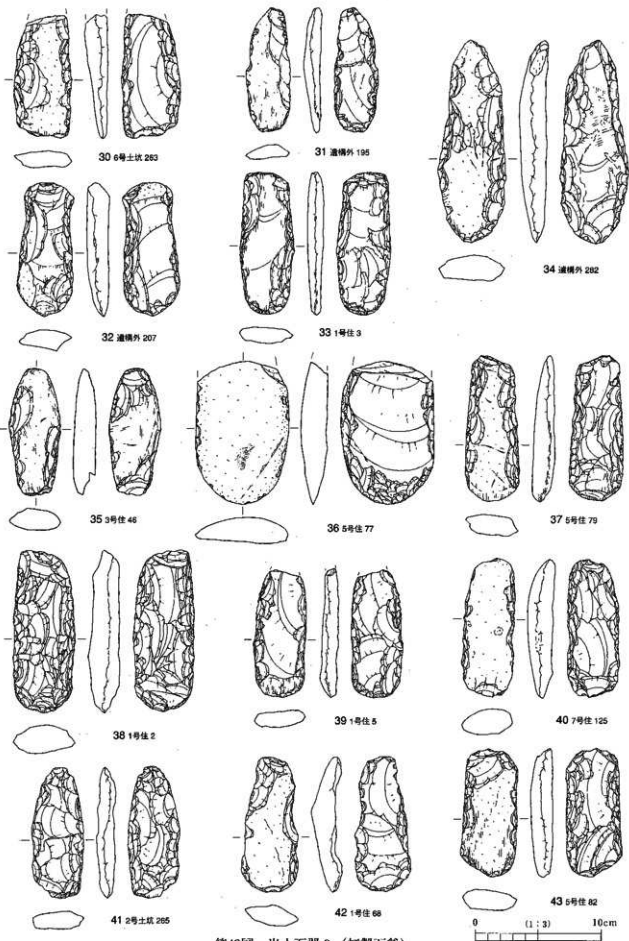
石棒 (156) 有頭の石棒であるが、頭部のくびれは強くない。下部を欠損している。



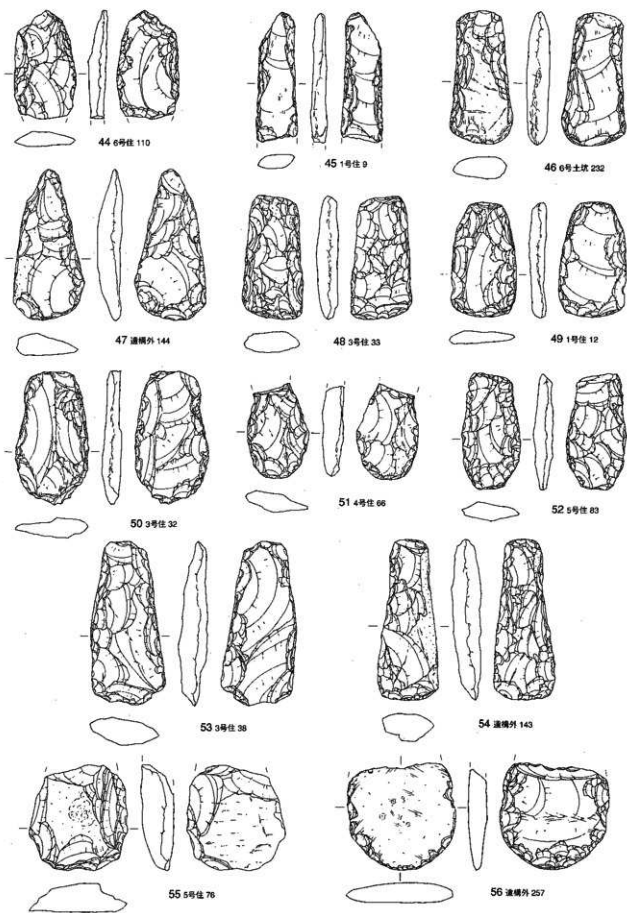
第41图 出土石器 1 (磨製石斧)



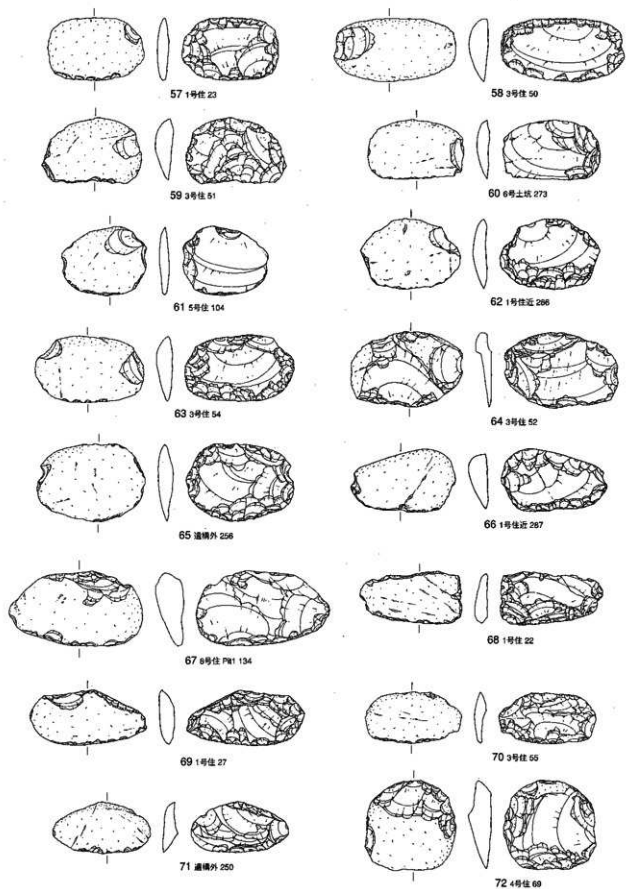
第42图 出土石器 2 (打製石斧)



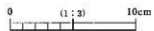
第43图 出土石器 3 (打製石斧)

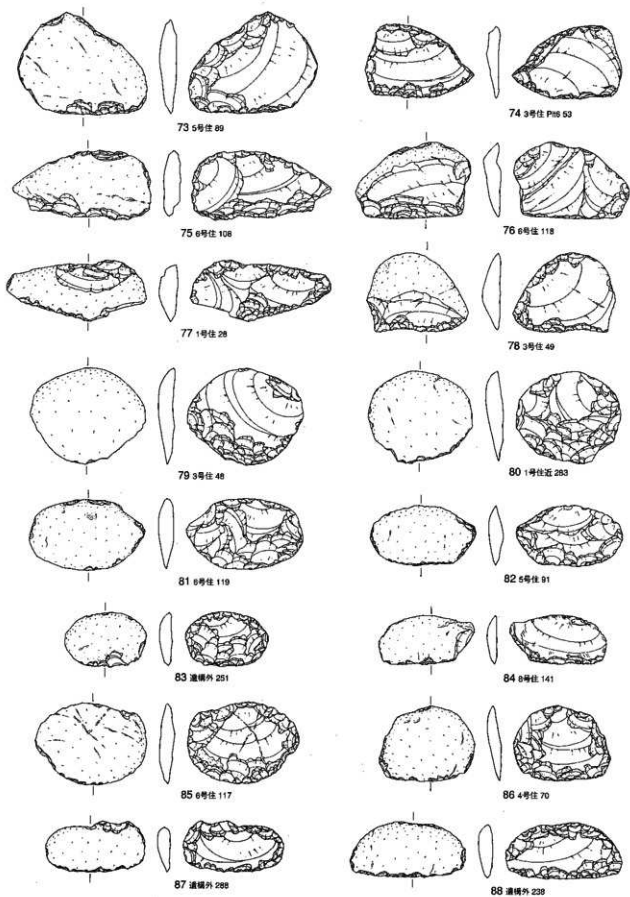


第44圖 出土石器 4 (打製石斧)



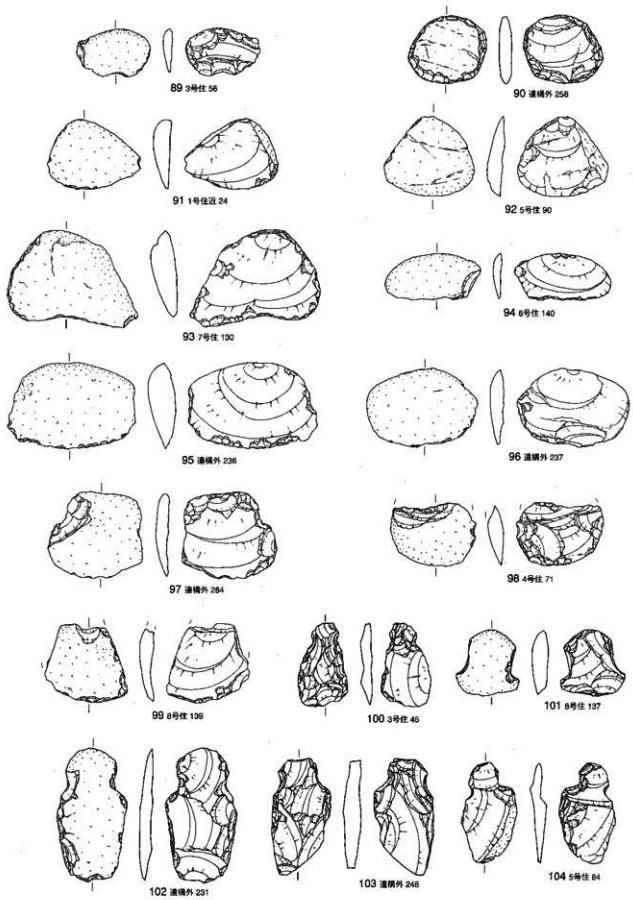
第45图 出土石器 5 (横刃)



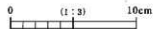


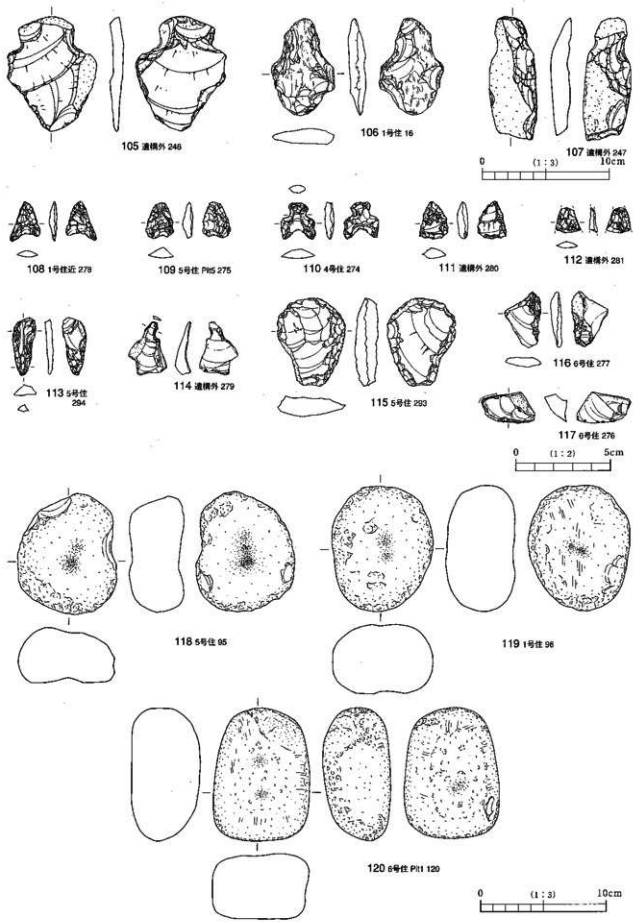
第46图 出土石器 6 (横刃)

0 (1:31) 10cm

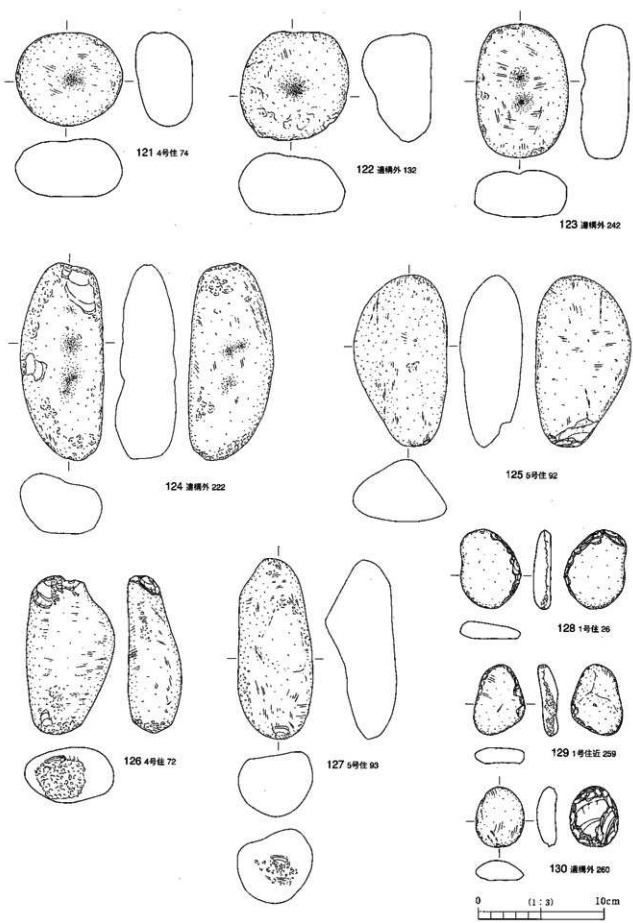


第47图 出土石器7 (横刃·石匙)

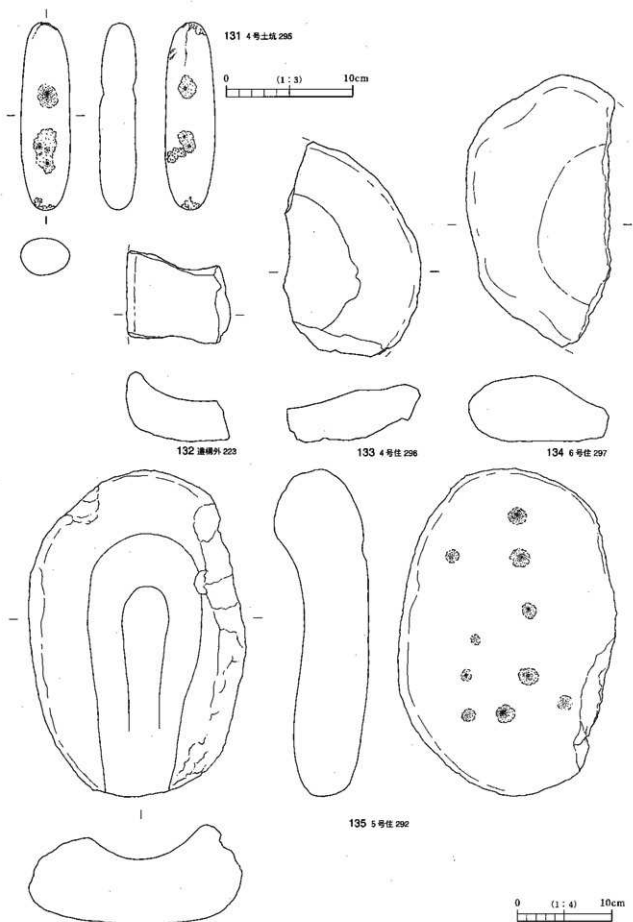




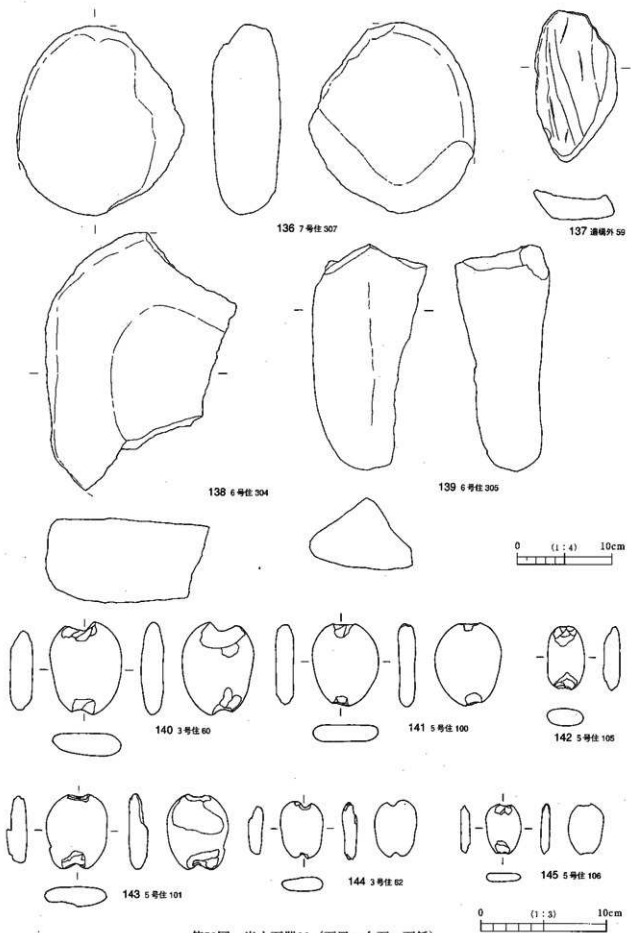
第48図 出土石器8 (石匙・石鏃・石錐・抉入石器・削器・二次加工のある剥片・凹石)



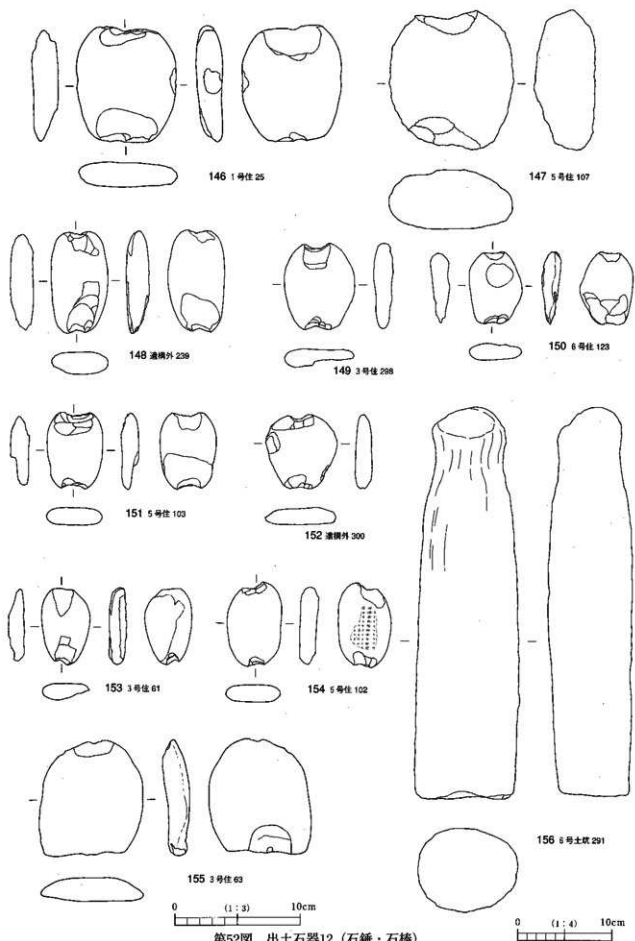
第49図 出土石器9 (凹石・敲石・敲打痕のある石器)



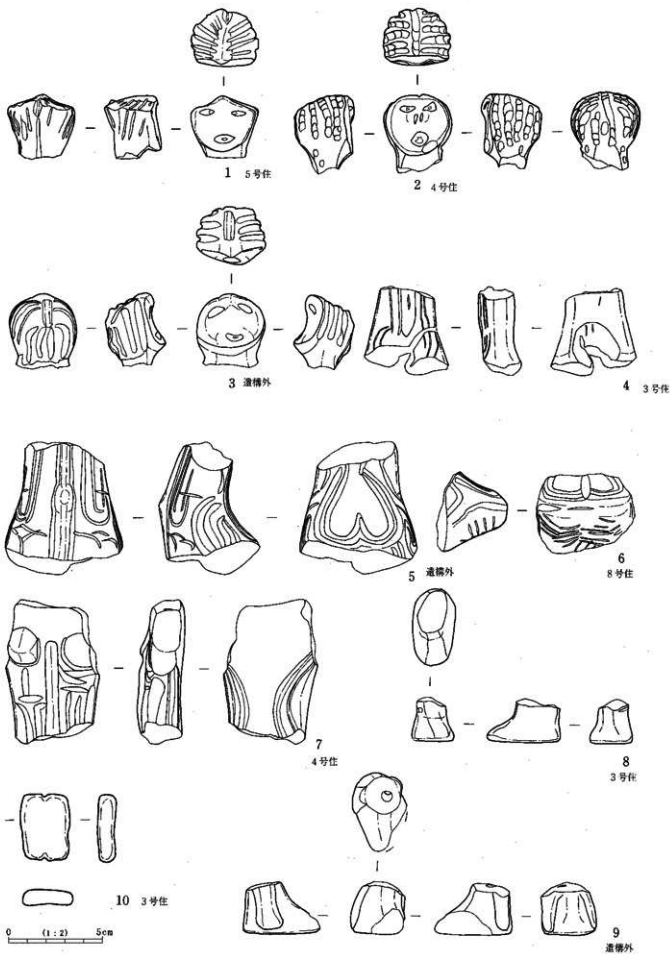
第50图 出土石器10 (戴石·石皿)



第51图 出土石器11 (石肌・台石・石锤)



第52图 出土石器12 (石锤·石棒)



第53图 土偶・土製品

図面No	器機名	形番	心材	芳部加工	機形加工	成形加工	塗材仕様	素材形態	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	出上用途	石器No
1	磨盤石舟	定角式	結核岩	不明	研磨	不明	不明	不明	定形	104.76	47.85	25.15	217.3	2-3磨	233
2	磨盤石舟	定角式	結核岩	不明	研磨	不明	不明	不明	芳部欠	77.83	38.10	9.50	38.5	SB05	87
3	磨盤石舟	定角式	結核岩	不明	研磨	不明	不明	不明	芳部欠	70.03	39.74	10.31	30.0	1-2磨	235
4	磨盤石舟	定角式	緑色片岩	不明	研磨	不明	不明	不明	芳部欠	861.49	121.19	19.38	15.7	SP01	262
5	磨盤石舟	定角式	結核岩	不明	研磨	不明	不明	不明	劣形	63.03	28.37	11.37	31.6	SB03	47
6	磨盤石舟	乳歯	結核岩	不明	研磨	磨打	不明	不明	基部欠	108.40	54.15	35.21	368.1	2-3磨	234
7	磨盤石舟	乳歯	緑色片岩	不明	研磨	磨打	適用外	再研磨	芳部欠	164.07	49.49	33.60	466.5	SP01 S-3	21
8	磨盤石舟	乳歯	ホルンフェルス	不明	研磨	磨打	不明	不明	芳部欠	1126.78	165.69	43.14	394.0	2-3磨	213
9	磨盤石舟	乳歯	ホルンフェルス	不明	研磨	磨打	不明	不明	芳部欠	95.02	60.98	161.38	256.8	SB07 S-2	133
10	磨盤石舟	乳歯	砂岩	不明	研磨	不明	不明	不明	基部欠	77.51	64.19	10.01	21.5	鏡上砥岩	261
11	磨盤石舟	鏡	緑色片岩	HD	研磨	不明	不明	不明	鏡面欠	103.15	37.95	13.63	84.9	SB05 S-1	86
12	磨盤石舟	鏡	砂岩	なし	研磨	磨打	適用外	鏡面磨	定形	136.67	38.91	20.41	134.5	SU01 P01	19
13	磨盤石舟	鏡	結核岩	不明	研磨	磨打	適用外	鏡面磨	定形	158.36	36.19	20.97	168.3	SB01 S-2	30
14	磨盤石舟	鏡	結核岩	不明	研磨	磨打	不明	不明	芳部欠	91.54	33.76	22.97	107.2	SB06	132
15	打製石舟	研磨1	砂岩	HD	HD+H+D	HD	適用外	鏡面磨	定形	126.37	30.09	23.71	178.0	SB03	29
16	打製石舟	研磨1	砂岩	HD	HD+H+D	HD	不明	鏡長割片	定形	116.29	31.71	17.68	90.1	SK01	268
17	打製石舟	研磨1	砂岩	不明	HD+H+D	HD	不明	鏡長割片	芳部欠	113.62	67.00	32.70	354.4	SB07	124
18	打製石舟	研磨1	砂岩	HD	HD+H+D	HD	不明	鏡長割片	定形	91.43	38.37	18.74	73.8	SB03	34
19	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡面磨	定形	127.32	50.51	21.95	209.6	SB01	1
20	打製石舟	研磨2	砂岩	不明	HD	HD	不明	鏡長割片	芳部欠	97.45	38.48	18.08	77.8	SB07	126
21	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡片	定形	119.52	39.38	20.97	86.9	SD01	4
22	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	基部欠	113.06	49.92	17.00	103.2	1-2磨	229
23	打製石舟	研磨2	結核岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	劣形	124.79	45.94	20.63	155.4	SB05 S-5	78
24	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	右端一部欠	97.26	31.96	16.53	57.8	SB06	100
25	打製石舟	研磨2	結核岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	劣形	106.07	38.11	14.82	84.1	SB08 S-4	135
26	打製石舟	研磨2	砂岩	なし	HD	HD	適用外	鏡面磨	定形	117.28	39.87	21.54	112.8	SB05	80
27	打製石舟	研磨2	砂岩	なし	HD	HD	不明	鏡長割片	基部欠	75.90	47.24	13.49	45.1	SB04	65
28	打製石舟	研磨2	結核岩	不明	HD	HD	不明	鏡長割片	芳部欠	72.52	34.82	19.48	66.4	SK04	264
29	打製石舟	研磨2	砂岩	不明	HD	HD	適用外	鏡面磨	芳部欠	48.41	38.32	10.60	18.6	SB01	17
30	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	基部欠	97.15	46.49	18.22	101.3	SK02	263
31	打製石舟	研磨2	結核岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	定形	97.73	36.32	14.18	51.8	鏡上	196
32	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡片	定形	106.06	45.01	18.21	110.0	2-3磨	207
33	打製石舟	研磨2	結核岩	HD	HD	HD	不明	鏡片	定形	112.49	42.90	12.70	96.3	SB01	3
34	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	定形	157.88	54.38	22.01	214.6	2-3磨	282
35	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	HD	適用外	鏡面磨	定形	99.66	60.62	16.87	94.8	SB05	76
36	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	なし	不明	鏡片	基部欠	013.640	73.06	22.30	241.8	SB06	47
37	打製石舟	研磨4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	定形	114.30	44.33	17.03	112.7	SB05	79
38	打製石舟	研磨4	結核岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	劣形	127.77	48.33	23.67	197.6	SP01 S-1	2
39	打製石舟	研磨4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	基部欠	100.96	41.61	12.58	73.6	SD01	3
40	打製石舟	研磨4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	定形	108.98	41.25	19.77	122.6	SB07	128
41	打製石舟	研磨4	花崗岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	劣形	103.56	41.77	14.92	79.2	SK02	205
42	打製石舟	研磨4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡片	定形	106.70	46.62	23.25	87.9	SB01 S-6	68
43	打製石舟	研磨4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	定形	101.36	44.28	17.00	113.3	SK05	62
44	打製石舟	研磨4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	芳部欠、基部一部欠	48.21	85.29	12.94	99.5	SP06	110
45	打製石舟	研磨4	結核岩	不明	HD	なし	不明	鏡片	芳部欠	104.71	32.47	11.54	59.0	SB01 S-15	9
46	打製石舟	研磨2	砂岩	HD	HD	なし	不明	鏡片	定形	105.79	49.97	18.56	132.0	SK06	232
47	打製石舟	研3	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	劣形	119.02	56.79	19.35	115.2	2-3磨	144
48	打製石舟	研3	ホルンフェルス	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	劣形	96.80	48.66	17.29	111.4	SB03	33
49	打製石舟	研3	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	定形	90.06	52.74	12.02	81.4	SB01	12
50	打製石舟	研3	緑色片岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	基部欠	104.41	59.72	14.24	112.5	SB03 S-9	32
51	打製石舟	研4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	基部欠	74.80	49.72	17.03	74.0	SB04	66
52	打製石舟	研4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	定形	91.47	47.34	16.97	67.5	SB05	83
53	打製石舟	研4	砂岩	HD	HD	HD	不明	鏡長割片	劣形	128.97	61.06	22.14	179.6	SB03	38
54	打製石舟	研4	砂岩	HD	HD	HD	適用外	鏡面磨	定形	127.30	49.83	28.04	153.9	鏡区 3磨	143
55	打製石舟	不明	砂岩	HD	HD	不明	鏡片	基部欠	83.12	77.81	25.13	194.5	SB06	76	
56	打製石舟	不明	砂岩	HD	HD	なし	不明	鏡片	基部欠	81.50	84.11	15.42	154.2	鏡磨外	267

第3表 石器属性表1

品名No.	品名	形種	石材	刃端加工	裏面加工	成形加工	裏材技術	裏材形態	保存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	出土遺物	石器No.
57	横刀	1	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	48.70	75.97	9.50	44.5	S901	23
58	横刀	1	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	40.02	94.92	16.37	79.2	S203	50
59	横刀	1	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	52.27	78.63	14.69	61.0	S1003 S-8	51
60	横刀	1	砂岩	なし	HD	なし	不明	横長薄片	完形	46.71	73.65	10.25	45.6	SK06	273
61	横刀	1	砂岩	なし	HD	なし	不明	横長薄片	完形	53.32	66.99	8.62	33.4	SD65	104
62	横刀	1	砂岩	HD	HD	なし	HD	横長薄片	左側欠	55.88	78.45	11.13	51.6	S1003 S-3	286
63	横刀	-1	砂岩	HP	HD	なし	不明	横長薄片	完形	51.19	85.19	12.63	65.3	SD03	54
64	横刀	2	砂岩	HP	HD	なし	不明	横長薄片	完形	59.39	80.24	15.65	59.3	SD03	52
65	横刀	2	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	61.85	66.28	15.88	81.9	表土	256
66	横刀	2	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	49.00	81.96	17.10	60.6	SU01近	287
67	横刀	3	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	105.21	69.24	21.94	130.0	S1008 Pst1	134
68	横刀	3	砂岩	なし	HD	なし	不明	横長薄片	完形	43.29	81.19	9.06	37.8	SD01 2層	22
69	横刀	3	砂岩	HP	HD	なし	不明	横長薄片	完形	44.90	59.04	12.18	58.0	SU01 2層	27
70	横刀	3	砂岩	HP	HD	なし	不明	横長薄片	完形	41.33	78.78	10.27	30.6	SD03	55
71	横刀	3	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	45.40	77.35	12.91	38.3	講士辻か	250
72	横刀	3	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	71.33	73.14	19.18	101.4	S1004	99
73	横刀	3	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	78.50	101.15	14.43	109.8	SD05 S-4	89
74	横刀	3	砂岩	HP	HD	なし	不明	横長薄片	完形	56.81	85.21	10.01	52.3	SD03 Pst5	53
75	横刀	-4	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	108.36	54.73	13.33	92.9	SD06 S-3	108
76	横刀	4	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	58.89	81.20	15.03	70.8	SD06	118
77	横刀	4	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	刃部一部欠	47.14	110.98	15.10	80.5	SD01 2層	28
78	横刀	4	砂岩	HP	HD	なし	不明	横長薄片	完形	63.97	80.43	15.03	68.9	SD05	49
79	横刀	4	凝灰岩	HD	なし	なし	不明	横長薄片	完形	75.76	91.95	12.99	110.1	SD03 穴 F	48
80	横刀	4	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	72.01	82.22	14.44	86.2	SD01 近	283
81	横刀	4	ホルンフェルス	不明	不明	なし	不明	横長薄片	完形	56.18	92.18	13.33	69.9	S1006	119
82	横刀	4	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	48.05	83.42	13.22	30.1	SD05 穴 F	91
83	横刀	4	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	43.06	64.53	10.75	33.4	1層	251
84	横刀	4	凝灰岩	HD	なし	なし	不明	横長薄片	完形	30.63	76.58	8.26	28.9	SD08 中 F	141
85	横刀	4	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	63.77	87.29	12.83	71.3	S1006	117
86	横刀	5	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	59.99	75.68	9.26	51.8	SD04 S-2	70
87	横刀	5	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	43.50	90.80	11.92	54.1	表土	338
88	横刀	5	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	39.54	79.31	9.83	36.9	2-3層	388
89	横刀	5	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	37.40	57.87	7.13	17.9	SD03	56
90	横刀	5	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	62.22	85.12	11.72	54.4	1-2層	258
91	横刀	6	砂岩	なし	なし	なし	不明	横長薄片	完形	53.26	74.26	14.35	59.4	SD01 近	34
92	横刀	6	砂岩	なし	HD	なし	不明	横長薄片	完形	65.62	63.94	13.84	63.9	SD05	90
93	横刀	6	凝灰岩	なし	不明	なし	不明	横長薄片	完形	71.18	104.81	21.26	134.8	SD07 S-5	130
94	横刀	6	砂岩	なし	なし	なし	HD	横長薄片	完形	36.90	74.91	6.69	20.9	SD08	140
95	横刀	6	凝灰岩	なし	HD	なし	HD	横長薄片	完形	68.89	101.31	20.57	185.2	1-2層	236
96	横刀	6	凝灰岩	HD	HD	なし	HD	横長薄片	刃部一部欠	60.54	87.54	11.46	69.9	3層	237
97	横刀	6	砂岩	なし	HD	なし	不明	横長薄片	刃部一部欠	68.66	75.96	11.01	56.2	2-3層	284
98	横刀	不明	砂岩	なし	HD	なし	不明	横長薄片	上部欠	50.04	89.36	12.72	42.1	S1004 S-10	71
99	横刀	不明	砂岩	なし	不明	なし	不明	横長薄片	刃部一部欠	62.00	66.61	10.82	42.4	SD08 背面	139
100	石筥	凝灰岩	砂岩	HD	HD+HP	なし	不明	横長薄片	完形	65.18	79.15	9.23	22.4	SD03 S-4	45
101	石筥	凝灰岩	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	52.84	51.28	13.15	38.9	SD08 背面	137
102	石筥	凝灰岩	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	106.35	56.15	13.10	78.4	1-3層	331
103	石筥	凝灰岩	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	刃部一部欠	92.72	47.26	15.69	72.1	表土	245
104	石筥	凝灰岩	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	79.53	64.38	13.40	36.4	SD06	84
105	石筥	凝灰岩	砂岩	HD	HD	なし	不明	横長薄片	完形	89.58	71.22	14.64	82.1	2-3層	248
106	石筥	凝灰岩	砂岩	HD	HD	HD	不明	薄片	刃部一部欠	76.38	59.85	12.95	47.6	SD01	16
107	石筥	凝灰岩	砂岩	HD	HD	なし	不明	薄片	完形	96.41	37.60	14.93	62.6	表土	247
108	石筥	内蔵	凝灰岩	SP	SP	なし	不明	薄片	断部欠	20.37	15.60	4.96	0.9	SD01 近	278
109	石筥	内蔵	凝灰岩	SP	SP	なし	不明	薄片	断部欠	18.66	14.85	5.01	1.0	SD08 Pst5	275
110	石筥	内蔵	凝灰岩	HP	HP	なし	不明	薄片	完形	200.93	88.07	5.31	1.3	SD04	274
111	石筥	手巻	凝灰岩	SP	SP	なし	不明	薄片	一部欠	19.22	14.98	6.13	1.4	表土	280
112	石筥	不明	凝灰岩	SP	SP	なし	不明	薄片	断部欠	12.90	12.90	4.69	0.4	表土	281

第4表 石器属性表2

階級No.	設備名	形番	石材	加工加工	整形加工	成形加工	素材技術	素材形態	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	出土層	石群No.
113	石群	遮光石	チャート	なし	HP	なし	不明	割片	上彫欠	3033	1194	653	23	S505	254
114	侵入石群	遮光石	高嶺石	なし	なし	なし	不明	割片	突起	2727	3037	794	13	表上	279
115	前扉	遮光石	チャート	なし	HP	なし	不明	割片	F部欠	4536	3641	1165	197	S106	153
116	二次加工のある割片	遮光石	高嶺石	なし	HP	なし	不明	割片	突起	2883	1919	631	25	S505	277
117	二次加工のある割片	遮光石	高嶺石	なし	HP/磨面	なし	HVD	割片	突起	1769	2783	1179	37	S106	276
118	凹石	遮光石	花崗岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	9438	7935	4454	563	S106	95
119	凹石	遮光石	花崗岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	9721	8041	8354	6330	S106	96
120	凹石	遮光石	花崗岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	7506	8324	4607	3981	S104	74
121	凹石	遮光石	花崗岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	8432	8264	3265	5375	遺構跡	132
122	凹石	遮光石	花崗岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	10595	7037	3628	4566	1-3層	243
123	凹石	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	10328	7476	5128	6608	S106 P11	120
124	凹石	遮光石	安山岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	移状塊	突起	15441	6696	4922	7323	2・3層	223
125	嵌石	遮光石	凝灰岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	13374	7403	4831	7066	S105	92
126	嵌石	遮光石	凝灰岩	遮光外	不明	遮光外	遮光外	塊	突起	11726	6628	3686	4443	S104 S-3	72
127	嵌石	遮光石	凝灰岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	14240	5633	592	5732	S105	93
128	嵌打痕のある石	遮光石	砂岩	遮光外	H/D	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	6373	4788	1323	832	S101	36
129	嵌打痕のある石	遮光石	砂岩	遮光外	H/D	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	5747	4209	1367	379	NB12	159
130	嵌打痕のある石	遮光石	砂岩	遮光外	H/D	遮光外	遮光外	割片	突起	4735	3672	1626	366	1-2層	260
131	嵌石	遮光石	凝灰岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	突起	19850	5300	3900	7059	S104 S-4	295
132	石壁	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	半突起	1100	900	440	6850	トレンチ	223
133	石壁	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	半突起	1430	2280	520	24000	S104 S-9	296
134	石壁	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	半突起	2840	1520	960	47000	S106 S-2	297
135	石壁	遮光石	花崗岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	半突起	3470	2330	1050	110000	S105 S-6	292
136	石壁	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	半突起	2590	1760	730	36050	S107 S-3	307
137	石壁	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	半突起	1500	850	250	3200	タレントン	59
138	白石	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	半突起	2730	2100	900	69000	S106 S-4	304
139	白石	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	塊	半突起	2400	1210	760	21000	S106 S-1	305
140	合石	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	7300	5750	1800	1080	S103	60
141	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	6530	5300	1400	750	S106	100
142	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	4930	2900	1400	3120	S105	105
143	合石	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	5630	4800	1600	890	S105	116
144	石群	遮光石	凝灰岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	4450	3330	1150	2310	S103	62
145	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	3600	2600	700	1200	S106	106
146	合石	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	6150	7930	2100	2360	S101	205
147	石群	遮光石	花崗岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	10650	9740	4800	7140	S103	107
148	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	7900	4450	1800	960	遺構跡	239
149	合石	遮光石	凝灰岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	6700	5550	1550	727	S103	158
150	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	6700	4250	1350	4400	S106	123
151	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	5900	4450	1350	530	S105 S-10	303
152	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	5750	5650	1300	607	遺構跡	300
153	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	6000	3750	1300	810	S101	61
154	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	6630	4200	1400	630	S105	102
155	石群	遮光石	砂岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	突起	9130	8200	2050	2080	S103 S-6	63
156	石群	遮光石	花崗岩	遮光外	遮光外	遮光外	遮光外	扁平塊	下部欠損	41700	11100	8030	66800	S106	291

【石材の説明】 表右側の欄目

※画像：各石で、断面に写し込まれている部分とその位置を示す。

加工石は、断面に写し込まれている部分とその位置を示す。

1. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。2. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。3. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。4. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。5. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。6. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。7. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。8. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。9. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。10. 断面加工：断面に写し込まれている部分とその位置を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

※画像：断面加工の断面を示す。

第5表 石群属性表 3

第4章 科学分析－炭化種実－

新山雅広 (パレオ・ラボ)

丸山遺跡から出土した炭化種実

1. 試料と方法

炭化種実の検討は、試料番号1～37の合計42試料(試料番号11、14、26、34、35は、各2試料ずつ含む)について行った。各試料は、炭化物を主体としており、乾燥状態で袋に保存されたものである。これら試料を実体顕微鏡下で観察し、炭化種実の同定を行った。なお、試料の時代は、縄文時代中期後半と考えられている。

2. 出土した炭化種実

全試料で出土した分類群・部位は、オニグルミ・炭化核、コナラ属・炭化子葉、クリ・炭化子葉、キハダ・炭化種子、トチノキ・炭化種子である。これら出土した炭化種実の一覧を表に示した。なお、出土種実の大半は、破片であったが、完形に換算して1個分以上に相当すると推定されるものについては、各分類群の右の欄におよその個数を示した。また、個数の欄が全て空欄になっている試料は、炭化種実として同定し得るものを全く含んでいなかったものである。以下に、各遺構ごとに出土炭化種実の記載を示す。

SB1(試料1～13):出土したのは、コナラ属、クリ、トチノキであった。クリは多産し、炉(試料1、2)をはじめとして全体で15～20個程度が出土したと換算される。トチノキも数試料から得られ、3層では、3～4個分に相当する破片が出土した。コナラ属は、3層(浮遊)のみで得られた。

SB3(試料14～16):オニグルミとクリが僅かに得られた。

SB4(試料17～19):炉(試料17)のみからオニグルミが得られた。

SB5(試料20～23):炉(試料20)および炉内土(試料22)からそれぞれ1個分に相当するオニグルミが得られた。

SB6(試料24～29):オニグルミ、コナラ属、クリ、トチノキが出土した。クリが比較的多産し、炉(試料24、25)、旧炉(試料26)で特に目立った。オニグルミも炉、旧炉で得られたが、いずれも1個分に満たない少量である。コナラ属は旧炉(浮遊、試料27)、トチノキは旧炉(試料26)で僅かに得られた。

SB7(試料30～33):炭化種実はいずれも含まれていなかった。

SB8(試料34、35):オニグルミとキハダが僅かに得られた。

SK2(試料36、37):炭化種実はいずれも含まれていなかった。

3. 考察

出土したオニグルミ、コナラ属、クリ、キハダ、トチノキは概ね落葉広葉樹と言える。これらは、概ね食用とされる有用植物であり、縄文時代中期後半の食料源の一端であったと考えられる。出土個数からみた主なものは、オニグルミ、クリ、トチノキと言えるが、遺構によりこれらの出土状況に違いがみられる。すなわち、クリを主体とした遺構はSB1(炉ないし炉に関連した位置)およびSB6、トチノキを主体とした遺構はSB1(2～3層)、オニグルミを主体とした遺構はSB5であり、その他の遺構は出土個数が少なく、あまりはっきりとしたことは言えない。オニグルミは、僅かではあっても多くの遺構で出土するのに対して、SB1では全く出土しないのは特異と言える。コナラ属は、SB1・3層・浮遊(試料12)、SB6・旧炉

・浮遊（試料 27）で出土したが、今回の試料からみる限りでは、オニグルミ、クリ、トチノキに比べ、利用度は低かったのかもしれない。SB8・浮遊（試料 35）のみから出土したキハダは、樹皮が薬用や染料に用いられると言うが、炭化して種子が出土したことから、利用法と何らかの関連があるのかもしれない。

4. 炭化種実の形態記載

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 炭化核

核は完形であれば、側面観は卵形ないし円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面には、縦に不規則な筋（隆起）があり、明瞭な 1 本の縫合線が縦に走る。出土したものは、破片ばかりであり、利用後の残滓と言えよう。破片の表面は筋が入り、裏面は比較的著しい起伏がある。核壁は緻密で硬く、割れ口の断面は、空隙がみられることがあり、炭化すると割れ口には、光沢がみられることがしばしばある。

コナラ属 *Quercus* 炭化子葉

出土したのは、いずれも子葉が半分に割れた片方である。炭化子葉で種まで絞り込むことは困難である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化子葉

果実は完形であれば、三角状卵形ないし扁円形で表面には縦に細かな筋が多数入る。尻の部分には、縦に長いしわがある。出土したものは、果皮内部の食用部分にあたる炭化子葉である。

炭化子葉は緻密であり、表面には縦方向のやや深い筋（溝）が認められる。

キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 炭化種子

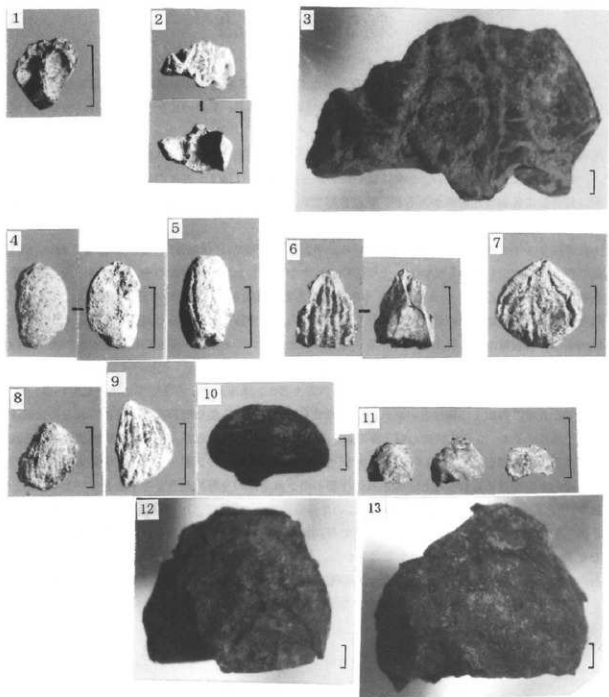
歪んだ狭倒卵形で一方の側面には細長いへそがある。表面には全体に微細な網目紋がある。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 炭化種子

種皮は薄くてやや堅く、炭化状態がよいと表面には光沢があり、指紋状の模様が見られる。出土種子は、種皮が張り付いたものもみられたが、あまり良好な状態で残っていない。子葉は完形であれば、楕円球形で表面にはコナラ属やクリのような筋などはみられない。

出土炭化種実一覧表										
番号	遺構種	遺構番号	位置	層	備考	オニグルミ 炭化核	コナラ属 炭化子葉	クリ 炭化子葉	トチノキ 炭化種子	キハダ 炭化種子
1	SB	1	炉					(19)	5~6	
2	SB	1	炉		浮遊			(6)	1~2 (1)	
3	SB	1	炉内					1(12)	2~3	
4	SB	1	炉内		浮遊					
5	SB	1	炉の土					(10)	3~4	
6	SB	1	炉の土		浮遊					
7	SB	1	炉近く					(4)	1	
8	SB	1		2層					(6)	1
9	SB	1		2層	浮遊					
10	SB	1		2層	炭化物			(10)	1	
11	SB	1		3層					(4)	
12	SB	1		3層	浮遊		(1)		(18)	3~4
13	SB	1	P38 内土					(10)	1~2	
14	SB	3	炉			(1) (3)		(2)		
15	SB	3	炉		浮遊					
16	SB	3	炉内土		浮遊	(1)				
17	SB	4	炉			(8)				
18	SB	4	炉		浮遊					
19	SB	4	炉内							
20	SB	5	炉			(16)	1			
21	SB	5	炉		浮遊					
22	SB	5	炉内土			(21)	1			
23	SB	5	炉内土		浮遊					
24	SB	6	炉			(7)		(4)	1	
25	SB	6	炉		浮遊			(8)	1~2	
26	SB	6	旧炉			(8)		(7)	2 (2)	
27	SB	6	旧炉		浮遊		(1)			
28	SB	6	床下		炭化物			(1)		
29	SB	6	埋ガメ		骨?					
30	SB	7	炉							
31	SB	7	炉内土		浮遊					
32	SB	7	旧炉		浮遊					
33	SB	7	P-6							
34	SB	8				(9)				
35	SB	8			浮遊					2
36	SK	2		最下層						
37	SK	2		最下層	浮遊					

第6表出土炭化種実一覧



図版1 出土した炭化種実 (スケールは1、2、4～9、11が1cm、3、10、12、13、が1mm)

1.オニグルミ、炭化核、試料20 2.オニグルミ、炭化核、試料22 3.オニグルミ、炭化核、試料22 4.コナラ属、炭化子葉、試料12 5.コナラ属、炭化子葉、試料27 6.クリ、炭化子葉、試料1 7.クリ、炭化子葉、試料3 8.クリ、炭化子葉、試料6 9.クリ、炭化子葉、試料24 10.キハダ、炭化種子、試料35 11.トチノキ、炭化種子、試料8 12.トチノキ、炭化種子 (11.左の拡大) 13.トチノキ、炭化種子 (11.中央の拡大)

第5章 結語

丸山遺跡の全貌は今回の調査ではつかめなかったが、1号・5号住居跡が他の遺構群に対して西に離れていることや調査区北側の丘陵上部の地形がやや平坦なことから、集落の広がりは調査区北側やJ R飯田線の西側に広がるものと思われる。

竪穴住居跡は縄文時代中期中葉から中期後葉で、平面形は円形・楕円形・八角や六角など様々な多角形で、一定の規範は感じられない。中央には石囲い炉とその周辺には4～6基の柱穴が認められる。床面の状況は部分的に稀薄な住居跡があるが、概ね良好である。7号住居跡では、覆土から多量の炭化物が検出されたことから焼失住居の可能性が考えられる。

土坑では2・3・4・6・7号の形状が類似している。平面形は円形で、直径は0.7～2.4m、深さ0.85～1.4m、断面の状況がほぼ矩形を呈している。土層の中部にやや硬化した面を持つものや、平石や円礫などを用いた石組みが認められる(2・4・6号土坑)ものなどがある。石組みは石囲い炉の形状に似ているが、焼土・被熱など炉として機能した痕跡は認められないことから祭りをを行った施設の可能性がある。本跡類似の遺構は山梨県の御坂町からも検出されている。土器の出土は僅かであるが、縄文時代中期中葉の後半の所産と考えられる。

出土遺物では、1号住居跡から大木系と考えられる土器が、床面直上から半完形で出土している。従来、伊那谷では大木系の出土は極稀といわれ、上伊那でも南に位置する飯島町の遺跡で認められたのは興味深い事例である。また、3号住居跡の覆土からは、近年注目されつつある畿内土器の北屋敷式と考えられる東海地方系統の土器が出土している。新6号住居跡からは関東地方の影響を受けたと考えられる加曾利E式併行期の土器が認められるなど、他系統の土器の出土は全体の土器の割合からすると多いといえる。

近年、伊那谷では中期中葉から後葉にかけての集落跡の調査が増加しつつあり、該期の遺物出土量もそれに比例して増加している。また、木曾谷も同じ傾向にあり資料の増加が認められる。本遺跡は、伊那谷の中でも上伊那・下伊那の中間に位置することから、両地域の土器や折衷色の強い土器が出土している。これらのことから、やや混沌傾向にあった土器の編年にも資料の増加に伴いいくばくかの進展が見られるものと予想される。本遺跡の資料がその一助になることを願いたい。

参考文献

- 三上徹也「所謂「唐草文」の構造・変遷と型式名に関する考察」2002 長野県考古学会誌 98
- 下平博之「大門原遺跡」1999 長野県飯田市教育委員会
- 飯島町誌編纂刊行委員会「飯島町誌・上巻・自然、原始古代編」1990 飯島町役場
- 菅原哲文「山形県における縄文時代中期の土器様相—中期後半の編年を中心として—」1999 山形考古第6巻第3号



調査区全景
(東から)



左：調査区、上空から
右：調査区から見る
中央アルプス



左：調査区西側
右：作業風景



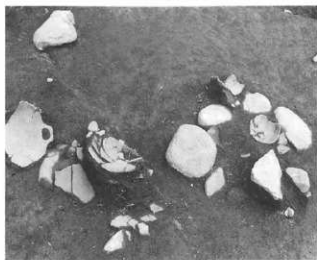


1号住居跡

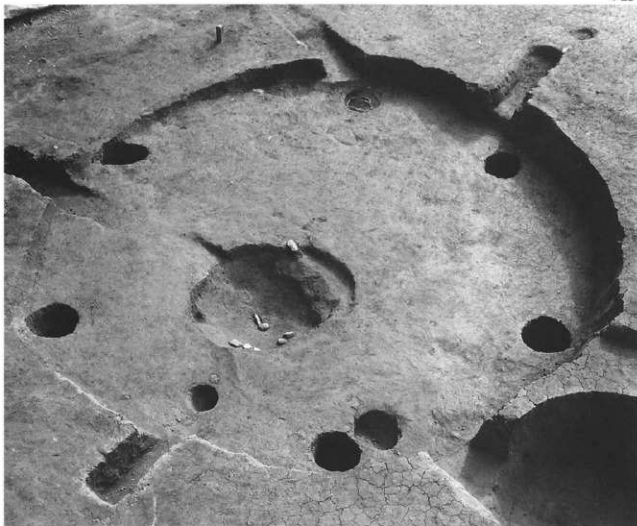


左：遺物検出状況

右：炉跡確認状況



左・右：炉跡上部遺物
出土状況



3号住居跡



左：炉跡

右：埋裏検出状況



左：埋裏断面

右：埋裏断面





4号住居跡



左：遺物出土状況
右：炉跡完掘



左：掘り形
右：土層断面



5号住居跡

左：炉跡 完掘
右：炉跡 断面左：遺物出土状況
右：炉跡、
炉石撤去時



6号住居跡



左：新炉
右：遺物出土状況



左：旧炉
右：掘り形

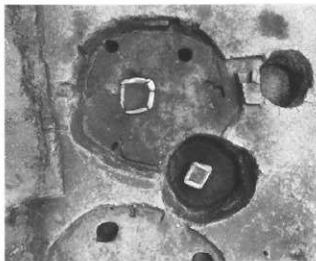


7号住居跡



左：炉跡

右：上空から



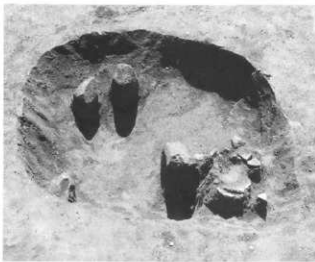
左：炭化材出土状況

右：埋葬出土状況





8号住居跡



左：炉跡
右：埋裏断面



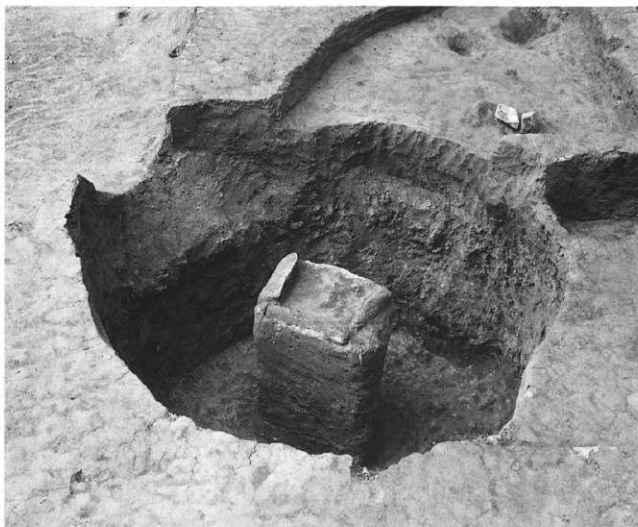
左：遺物出土状況
右：床下埋裏断面



左：4号土坑完掘
右：同遺物出土狀況



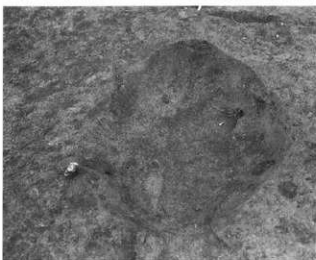
左：4号遺物出土狀況
右：5号土坑



6号土坑石組



2号土坑

2号土坑
左：石甗出土状况
右：完掘左：1号土坑完掘
右：3号土坑完掘



6号土坑完掘



6号土坑

左：断面

右：石槨 UP



左：6号石槨下土層

右：7号土坑





1-1



1-2



1-3



1-5



1-4



1-20



1-6



1-7



1-8



1-10



1-11



1-9



1-12



1-13



1-14



1-15



1-17



1-16



1-19



3-1



3-4



3-5



3-2



3-6



3-7



3-8



3-9



4-13



4-1



4-2



4-3



4-4



4-5



4-10



4-6



4-7



4-12



4-11



4-8



4-9



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5



5-6



5-7



5-9



5-8



5-10



5-11



5-12



5-13



5-14



5-15



5-16



5-17



5-18



5-19



5-20



5-21



5-22



5-23



6-1



6-9



6-2



6-3



6-4



6-6



6-7



6-5



7-1



7-2



7-3



7-4



7-5



8-3



8-4



8-5



8-2



8-6



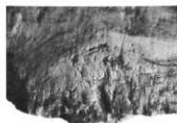
8-7



8-1



4号土坑-1



1 遺構外



25号住



3 遺構外



41号住



53号住



6 遺構外



71号住



8 遺構外



97号住



10 遺構外



115号住



121号住



131号住 Pk1



146号住



153号住



161号土坑



177号住



183号住



191号住



207号住



211号住



22 濠橋外



23 5号住



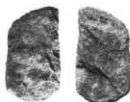
24 6号住



25 8号住



26 5号住



27 4号住



28 4号土坑



29 1号住



30 6号土坑



31 濠橋外



32 濠橋外



33 1号住



34 遺構外



35 3号住



36 5号住



37 5号住



38 1号住



39 1号住



40 7号住



41 2号土坑



42 1号住



43 6号住



44 6号住



45 1号住



46 6号土坑



47 遺構外



48 3号住



49-1号住



50-3号住



51-4号住



52-5号住



53-3号住



54 遺構外



55-6号住

打製石斧



56 遺構外

(1:3)



57-1号住



58-3号住



59-3号住



60-6号土沈



61-5号住



62-1号住近



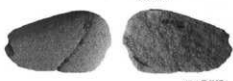
63-3号住



64-3号住



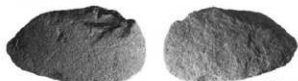
65 遺構外



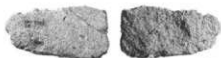
66-1号住近

横刃

(1:3)



67 8号位 Pit



68 1号位



69 1号位



70 3号位



71 遺構外



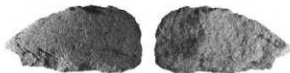
72 4号位



73 5号位 89



74 3号位 Pit 53



75 6号位



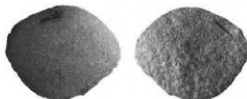
77 1号位



76 6号位



78 3号位



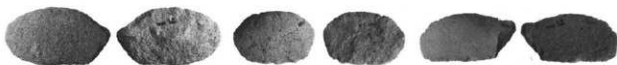
79 3号位



80 1号位近

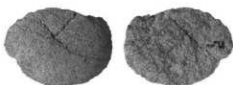


81 6号位



82 5号位

83 遺構外



85 6号位



86 4号位



84 8号位

横刃

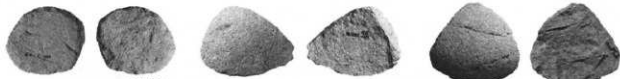
(1 : 3)



87 遺構外

88 遺構外

89 3号住



90 遺構外

91 1号住近

92 5号住



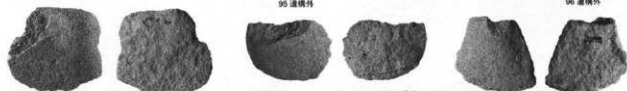
93 7号住

94 8号住



95 遺構外

96 遺構外



97 遺構外

98 4号住

99 6号住

横刃

(1 : 3)



100 3号住

101 8号住

102 遺構外

103 遺構外

104 5号住



105 遺構外

106 1号住

107 遺構外

石匙

(1 : 3)



108 1号住近

109 5号住 Pit5

110 4号住

111 遺構外

112 遺構外

石鏃

(1 : 2)



113号住

石錐



114遺構外

抉入石器



115号住

削器



116号住

二次加工のある剥片

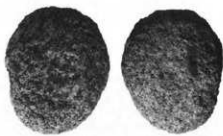


117号住

(1:2)



118号住



119号住



120号住 Pn1



121号住



122遺構外



凹石

123遺構外



124遺構外

(1:3)

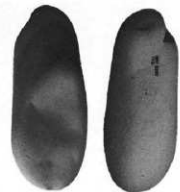


125号住



126号住

敲石



127号住

(1:3)



128号住



129号住近

敲打痕のある石器



130遺構外

(1:3)



133 4号住



134 6号住



135
5号住



136 7号住



137 遺構外



139 6号住



138 6号住



131 4号土坑



156
4号土坑



140 3号住



141 5号住



142 5号住



143 5号住



144 3号住



145 5号住



146 1号住



147 5号住



149 3号住



150 6号住



151 5号住



152 遺構外



154 5号住



155 3号住



10 3号住



1 5号住



2 4号住



3 遺構外



7 4号住



4 3号住



5 遺構外



6 8号住



8 3号住



9 遺構外

報告書抄録

ふりがな	まるやまいせき							
書名	丸山 遺跡							
報告名	農林漁業用探発税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書—飯島町内—							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	61							
編著者	藤原直人							
編集機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒387-0007 長野県更埴市屋代清水260-6 TEL 026-274-3891							
発行年月日	2003年(平成15年)3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
丸山遺跡 <small>まるやまいせき</small>	長野県上伊那郡 飯島町本郷 <small>ながのけんかみかいせき ながのけんかみかいせき いづみまちほんごう</small>	3840	56	35度39分31秒	137度56分7秒	平成13年 5月9日～ 9月27日、 10月9日	4100㎡	農林漁業用 探発税財源 身替農道整 備事業
所収遺跡名	立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項		
丸山遺跡	天竜川以 西の段丘 端部	集落	縄文時代中期後半	竪穴住居跡・ 土坑	土器・石器・ 土製品	水資源に恵まれた段 丘端部の集落跡		

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 61

農林漁業用揮発税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

——飯島町内——

丸山遺跡

発行 平成15年(2003)3月25日

発行者 長野県上伊那地方事務所

(助)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒387-0007 長野県更埴市屋代字清水260-6

TEL 026-274-3891

FAX 026-274-3892

印刷 葛友印刷株式会社

